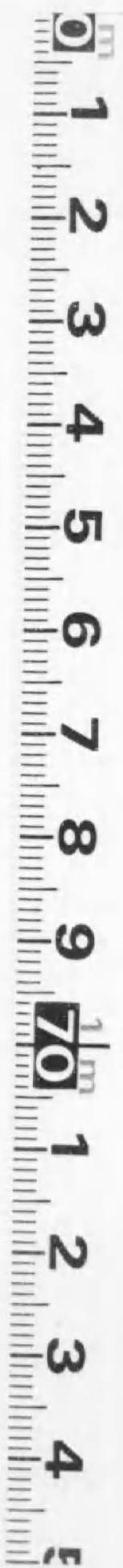


522
238



始





大正
13. 6. 6
内交

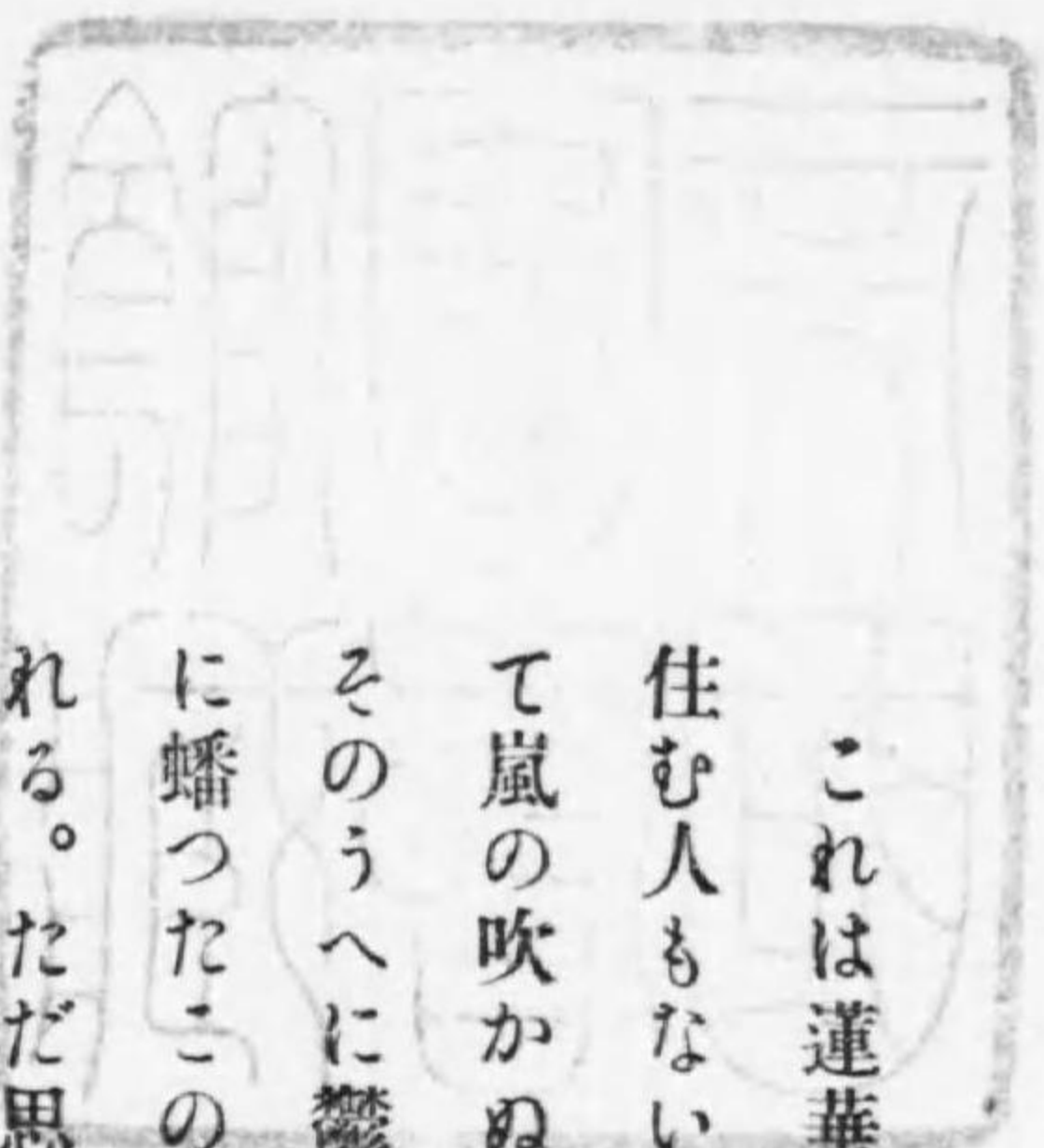
目次

島守……………一

犬……………五七

島
守

島 守



これは蓮華の形をしてゐるといふ湖のそのひとつの花びらのなかにある
 住む人もない小島である。この山國の湖には夏がすぎてからは殆ど日とし
 て嵐の吹かぬといふことがない。さうしてすこしの遮るものもない島は、
 そのうへに鬱蒼と生ひ繁つた大木、それらの逞しい根に培ふべく湖のなか
 に蟠つたこの島さへがよくも根こぎにされないと思ふほど無慘に風にもま
 れる。ただ思ふさま吹きつくした南風が北にかはる境めに、崖を駆け降り
 て水を汲んでくるほどのあひだ、今までの騒しさにひきかへて落葉松の心

を囁む木蝨の音もきこえるばかり静な無風の状態がつづく。

二

この島守の無事であることを湖の彼方の人々に告げるものは、折々食物を運んでくる「本陣」といふ男のほかには、毎夜ともす燈明の光と、風の誘つてゆく歌の聲ばかりである。彼は昔この村が街道筋にあたつて繁昌したころの御本陣のあとよりであるが、時勢の變遷や度かさなる村の災厄のために見る影もなく落ちぶれて、今はこの貧しい村でも汚いはうの數に入る一軒の家の主にすぎないけれど、その通り名だけはもとのまゝに嚴めしく「本陣」と呼ばれてゐる。彼は村ぢゆうでいちばん人が好いといはれるとほりおそらくこの國中でも最も善良なものゝ一人であらう。彼が島へくることは人嫌ひの私にとつてもただ一匹の鱒が遊いできたほどの愉快を與へるにすぎない。

たまさかに參詣の旅人をのせてくる村の者は芝蝦や烏貝といつしよにこの寒村のつまらぬ名物のひとつとして私の話をするのであらう。彼らは影法師のうつるのも忘れてそつと障子の孔から覗いたり、または森のなかを歩いてゐるところを見つけて變化ものゝ正體でも見現はすやうにじろくくと見まはしたりする。多くの者は私の不興げな顔を見て目を見あはせ囁きあつてそこへ歸つてゆくが、なかには好奇心にかられて、煙草の火をかりたり宮の名を尋ねなどするのにかこつけておづくくと話しかける者もある。彼らの問は鼠の道のやうにきまつてゐる。こんな島のなかになてなにをするのか、寂しくはないか、恐しくはないか……これらの問に對して私はなんと答へたらよいのであらうか。住むべき家もないゆゑ鴨のやうに迷つてきてこの島に宿をもとめたのである。寂しいといへば、都會の喧噪

三

の裡に、すこしの理解もない人々の群に交つてゐるより寂しいことがあらうか。こゝは湖の離れ島である。さりながら日月は追ひあふ水鳥のごとくにして朝夕に島を照して忘れることはない。私はこれらの木や、鳥や、蟲や、魚やと、友となり、兄弟となつて、美しい姉妹の神を送り迎へてゐる。私は今一人になつて、世のさかしらなる人々に愚なる己の姿を見る苦しみよりのがれ、またいかに人間はつまらぬ交渉をつゞけんがために無益に煩はされてゐるかを知つた。世のあさましいことは見つくしまたしつくした。今はたゞ暫しなりとも清浄なる安息を得たいと思ふ。旅人よ、私は卿等がかしましい濁聲をもつてこの寂寞を破らんことを悞れるばかりである。

島にひとり居ればまことに心ゆくばかり静である。讀書と冥想の暇には、

我が穴を嗅ぎまはる獸のやうに島のうちを道ひあるく。その蓮華の花の花びらに虻のとまつたほどのこの島にも、雨につけ、風につけ、なにかの新しいことがないでもない。栗の枝が吹き折られたこと、鳥が蜩の殻を落していつたこと……それらは島の歴史に残るべき大きな出来ごとである。また折ふし夢野の神はしのびやかにきて、冷な私の眠りを色々の夢の繪筆に彩つてゆく。それらのことを私は日々こま／＼と日記につけておく。これはこの島にかくれて島守の織る曼荼羅である。

明治四十四年九月二十三日

簑笠をつけた本陣に船頭をたのんでひどい吹き降りのなかを島へ渡つた。

これから私の住居となる家は年に一度の祭禮に遠方からくる神官の泊るために建てたもので、無性に打ちつけた寄せ集めの羽目板はところ／＼二三寸もずり落ち、そのうへ雨戸さへないゆるゑ、ほんの雨つゆのしのぎになるばかりで、夏がすぎればすぐ冬になるならひの山國の湖のなかに、たゞひとつ浮いて出たやうなこの島をめぐりて周圍の山々からおしよせてくる寒さを、この都人に防いでくれるほどの用にもたゝない。積みあげてある疊を幾枚か家のなかほどに敷いて座敷とし、かた／＼の床には白木造りの神輿、かた／＼には炊事の道具をならべ、疊の微をふき、あたりの塵を拂つてみれば、思つたよりは住みごゝちのよい住居になつた。梁のうへには笠鉾、萬燈、枝と繩と藁で面白い粗野な織物になつてゐる屋根裏からは太鼓、提灯などがぶらさがつてゐる。本陣はそこから板屑を拾つてきて焚きつけをこしらへ、米はこの

くらゐに、水はこれくらゐに、火はかうして と懇に教へながら晝飯の支度をして、やがて飯ができたのでちよこなんと畏つて給仕をしてくれる。それから南の濱へ降りて器を洗ひなどしてひととほり用事をすませたのち「ごはんが残つたらおじやにしておあがりなさい」といつて歸つていつた。あとに残つて私は これていよくひとりになつたと思つた。

二十四日

晝。火がおこつたので飯をかけて、こんろのまへに蹲つて煮える音をきいてゐる。噴きこぼれる飯をおろして鍋をかけ、蓋のうへで葱をきつては遊びごとのやうに一つ一つほうりこむ。焚きつけがなくなつたので後ろの杉の森

へいつて枯葉を拾ふ。村からきて拾つたとみえて細かいのばかりとところ／＼に黄色く濕つて落ちてゐる。それを一つづゝ拾ひ集めては左の手にためてゆく。

なにをするともなく日が暮れてまた晩飯をたく。今日は夜になるのが寂しい。その夜の闇のなかにひとつぶの晝の光を腰きとめておくやうなきもちで島の脊を燈明をともにゆく。落葉の音や木立にひゞく足音をきゝながら石段をおり、燈明をともしてなにを思ふともなく眺めいつてゐたが、やがてそこをはなれて、棧橋——とは名ばかりで古い舟底をそのまま、水にかけたただけのものである——のはなに立つて水を眺めてゐる。燈明の影が水にうつる。その水底に幾年となく落ちかさなつた枝、そのうへを小さな魚の子のゆくの透いてみえる。彼らはまことに天から生みおとされたかのやうに處をえ顔

である。今日は曇。□□にも□□にも炭焼の煙がたつ。煙が裾曳くのは山嵐であらう。

二十五日

雨まじりの風が烈しく吹いて島は終日波の音と木の葉の音に鳴りつゞけてゐた。島のなかには木の葉が雨のやうに降る。彼らは朝から日の暮れるまで、日の暮れから夜の明けるまで、ながいあいだ住みなれた梢に別れをつけてわるびれもせず土に歸つて行く。さうして地に落ちてからも暫くは若々しい心を失はずにあちこちと追ひあひさゝめきあつてゐる。

雨のなかを提灯をさげて燈明をあげにゆく。燈明が高いので水ぎはの石にのつてもまだいづばいに手をのばさなければならぬ。風のまをみてはとも

してもともしても扉をさゝぬうちに消えてしまふ。で、あきらめて歸つたが、なにか氣がすまないのもまた性懲りもなくともしにゆく。

燈明の下に立つ。風がますます荒れて波が折々裾を洗ふ。いらだつて風ぐまも待たずにともしはじめたが、今度は三度めにわけなくついた。石から降りて裾をしぼり、はかない喜にみちてちらめく影を見あげながら、湖の彼方にこの光を望む村の人たちは、島守が今日の一日の無事であつたことを知らせるための燈火とばかり眺めるであらうぞと思ふ。

二十六日

朝。晴。昨日ひろつた杉の葉で火をおこしてゐるところへ本陣が鉦と鋸と豆板と、頼んでおいた鯉節と、豊作さんからことづかつた香煎をもつてきて、

餅は焼いてばかりたべずに雑煮にするが、といつて、大きなひね茄子を二つ袂からだした。兩手にあまるほど肥えて石みたい堅い。また麴がすくないから不味からうけれど、といつて、汁をつくるために小さな瓶に辛味噌をくれた。本陣は俎のかはりに外から板を拾つてきてそのうへ、鉦で鯉節をかいてくれたが、私は雑煮は今度のこととして餅を焼いて食ふ。かやうにしてこの佗び住居には不相應な珍味のかす／＼がそなはつた。無性者の料理人は手輕をのみ心がけてなるべく材料をつかはない。米も持つてきたなり袋に一杯、砂糖もそのまゝ、山田から送つてくれた浪華漬もまだあけてもみない。玉子も笹に十ほど、葱が一本、はせもろこしも残つてゐる。今やこのソロモンの富を得た島守は、これらのものをどういふ順序に腹のなかに仕舞ひこまふかについてすくなからず苦勞をする。本陣は焚きつけをつくりをへて

煙草を吸ひながら味噌汁のかげんやなにかを教へていった。

一一一

いつからかこの神輿のなかに夫婦者の鼠が住んでゐるが、私ごとき人間に平和な生活を邪魔されるのを腹立つかのやうに毎晩言語道斷に荒れまはるの
で、昨夜からひとときの餅をいくつかに割つて床のうへにほうつておくことにした。貢ぎ物のおかげで一晩静であつたが、見れば餅は綺麗に運び去られてゐる。

二十七日

夕。棧橋に立つてゐるとき北の岡の峽から霧が吹きで、きたので今に島をつゝむかとおもつて眺めてゐたが、徐かに湖をわたつて東の山に沿ふていつてしまつた。秋になつて霧が急にすくなくなつた。燈明をつけてもどつてみ

ればもう鼠の音がしてゐる。昨夜は餅のかはりに一掴みの米を供へておいた
ら床につくまもなくぱち／＼とさも内證らしく食ふ音がした。今夜ははせもろこしをさゝげよう。

俄に雨の音。

二十八日

夜半。恐しい風の音に呼びさまされた。今人々はみな眠つて私一人覺めて
ゐるのであらう。私はこの島の嵐のなかにたゞ一人なることを思ひ、幸にみちて静に眠にいつた。

朝。散りしいた木の葉にまじつて翅のはえたいたやの種子が落ちてゐた。
山々がありたけの風を吹きつくしたかのやうに今朝は静である。かし鳥や、

一一三

啄木鳥や、鳥ちゆうを木づたひ鳴きかはす鳥のなかで鶯の聲がことによく訝に響く。なに鳥か大杉の梢で玉の椽を投げるやうに鳴く。湖水にうつる雲の影はしづかにうごき、雑魚の群は吹きかはつた新鮮の氣を吸ふやうに滑な水面に泡をたてる。

机にもたれたまゝ夕がたまでうとくした。そのあひだにいろくいな鳥の聲がきこえた。目をさましたら手が痺れてなにを持つても子供のやうに落ちてしまふ。

島守の一日の暮しぶりはかうである。朝目がさめるとながいあひだの習慣にしたがつて、睡後のけだるさが心臓から指の先まですつかり消えてしまふまでは静に床のなかに仰臥してゐる。漸く五體が自分のものになれば起きて南の濱へ顔を洗ひにゆく。雨の日やあまり寒い朝は前日に汲んでおく水で用

をすます。次には土間の蓄へのうちから一掴みの杉の枯葉とやゝ生のとを拾つて、五六本の木屑をそえてこんろに火をおこす。生の葉は燃えるときに濃い白い煙をたてるのと、ばちくとはせるのがよくてことさらにませるのである。また一本の燐寸のほかに藁の帯をした束のなかゝら一枚の附木をぬきだして、そのさつとひいた硫黄の色、泡だちながら燃える紫の燭、つんと鼻をつく強いかをりのためにその一枚を無駄につかふ。燃えたつ火のなかへ三つ四つ手づかみに投げこむ炭のおこるころには、杉の葉は灰に、木屑はほどよくおきになつて、そのうへに土瓶がのせられる。掃除をすませて餅の徴をけづり、玉子や茶道具をそばにならべ、小皿に醬油をうつすじぶんにはちやうど湯が沸く。そこで火箸を火のうへにわたして餅をのせ、その焼けあんばいによつてこんろの扉のかげんをするのをひとりで興がりながら端から醬油

をつけては食ふ。それから玉子をのみ、豆板をくひ、茶をすゝつて朝の食事ををへ、ひと休みのうち食器をかたづけけるまで、火を焚きつけてから約一時間半を費す。一晚のうちにまつたく虚になつた胃の中へ、甘い、鹹い、澁い食物を充分に詰めこんだ満足は愉へやうもない。少憩ののち讀書、若くは日記。時間と手数のために晝食をはぶき、もし暖ならば南の濱へ降りて體を拭く。膝ぶしぐらゐまで水にはひつて、摩擦によつて充血した皮膚を日光にあて、また微風に冷しながら、四方の山を眺めてゐる氣もちはまことに爽快である。もし濯ぐべき衣類食器などあればついでに洗ふ。歸つて心臓の鼓動のしづまるのをまつて讀書、要すれば午睡。三時半夕食の用意にかゝる。これは二食なのと、暮れるまでにゆつくり散歩する時間を得たいがためである。大體の順序は朝におなじ。但し夕食には雜煮をくふので、餅の微をおとして

からおなじ庖丁で鯉節をかき、茄子の皮をむいて銀杏にきり、つゆのかげんをして鍋をかけねばならぬ。靜に休んでから手ばやく食器をかたづけ、火を消して鳥居へゆく。さうしてそこから宮までのあひだの長い路を、落葉を拾つたり、歌をうたつたり、木の根をまたいだり、石段をあがつたり降りたりして、火をともしるところまで歩いてゐる。

夕。鳥居へ降りていつたら棧橋のうへに鶴鴿が一羽ゐた。そつとしやがんで見てゐるうちにぢきにこちらを見つけてびゝびゝと鳴きながら小島が崎の葦のなかへ、そこには二三羽の友達がゐておなじやうに鳴きつれて□□の道のはうへ飛んでいつた。

汀に一房の木の實が落ちてゐた。枝わかれした淡紅の莖のさきに南天に似た暗緑の實をつけてゐる。もつて歸らうと思つて舟板のうへへのせておく。

青い岩床の凹みに波がよせてははひあがるやうに遙に□□の山の峽に灰色の雲が打ちつけてゐる。暮れてきたので實をとりあげて燈明に火をともし。心づよくもただ一人かゝる島には住みながら、□□、□□、□□の山々をつゝむ恐しい雲の彼方に秋の日のうすれて落ちてゆくのをみれば、さすがにわりない里戀しさをおぼえる。

三十日

餅にもあきて飯をたく。巧くできたので浪華漬をだす。型のごとくがんじやうな桶で、蓋には青肉で浪華漬と押し紙を貼り、朱印のにじんでゐるのもいゝ。天王寺、六萬體町、六萬堂も氣にいつた。小刀で目ばりの紺紙をきつてすこし蓋をこじあける。と、ふんと粕の匂がする。そうつと粕を剝いで

みる。下のはうにすばらしい瓜の奴がうまさうに色づいてかくれてゐる。奥にはまだなにかゝる様子だったが楽しみにしてわざと見ずに瓜をだす。蓋のうへですこしきつて茶漬の菜にし、残りは大切にまた埋めておく。

夕。鳥居から歸つたら褐色のてんとう蟲が机のうへをはつてゐた。

夜。雨。島のまはりを一本足のものが跳んで歩く音がする。なに鳥か闇のなかをひゆうくと飛びまはる。雨の音はなにがなしもの懐しい。戀人の靈のすぎゆく衣すれの音のやうに。

十月一日

明けがたまで降つたとみえて土も落葉もしつとりとぬれて、雲はそのまゝに残りながら雨はあがつてゐた。湖の島の朝風はまことにたとしへなく静で

ある。森はしん／＼としづまりかへつてをり／＼杉の枯葉がこそりと落ちるばかり、幾億の木の葉のひとひらもそよぎはしない。

南の濱へおりて顔をあらひ、米をとぐ。□□の山なみに淡黄の雲がみえて今日は晴かと思はせる。鍋をさげて坂をのぼる。家のうしろでなに鳥かきゆう／＼と鳴く。火をおこしたところへ本陣が玉子をもつてきた。鏝のひろい箆の底にまろびあふいろ／＼な鶏の玉子は私のために貧しい村の隅々から寄せあつめたものである。飯がふくじぶんまで話して本陣は歸つた。

食後。島の脊をあるく。菜莢の枝が落ちてゐた。今朝遊びにきた村の子がすてたのであらう。大きな鳥の羽をひろつてきた。鳥の落してゆく羽は天から降つた寶ものみたいに子供心に嬉しかった。柔い鳥の羽をひろふと家ではそれを羽箆にして茶の粉をはきよせるのを、それは自分が拾つたのだといつ

ては御褒美に重たい石臼を数をきめてまはさせてもらふ。私はわざと臼を躍らせて香の高い茶の粉をぱつと立たせるのが好きであつた。しめやかな茶臼の音は今も耳に残つて古い昔のかをりをしのばせる。——これはかすかに紺色の光澤をおびて絹のやうにすいてみえる幅のひろい羽である。棊にしようとおもふ。

南の濱には雑草のなかに小菊がさきみだれてゐる。さうして汀に立つたただ一株の大木のほかには、いつも水を汲んだり米をといたりするところ一本のみづ木と柳が枝をまじへてゐるばかりで、とりたてゝいふほどの木もない。柳は水のうへへのりだして、風の日にはなびき、雲のない日には影をうつす。その根もとには蘚苔の糸根かなにかいつばいに紅く波にあらはれて、渚には砂まじりの小石が綺麗にすいてみえる。そこで器を洗ふと雑魚の群が

よつてきて指をせゝる。時にはまた蟹が缺をあけて這ひよるのを匙ですくつて水のなかへ投げてやれば、そのまゝ深みへはひこんでしまふ。こゝは崖と森に北風をせかれて島のなかでいちばん暖い處である。春の野の繪に似て和かな南の岡は湖の彼方に波うち、そこにほとくと模様をおいた灌木、榛の木の小村へかよふ小路、草を負ふた馬や人のとほるのもみえる。秋になると皆か草を刈りにゆくとさいだが、見ればところごとく綺麗に刈られて、幾團にも刈草が積まれてゐる。

夕。鳥居へおりる石段のなかほどまでいつて立つてゐた。北風がひゆうひゆうと雨をうちつける。右ての小暗い葦のなかにうけがひとつうち寄せられてゐるのではかにもありはしないかと思つて見まはしてゐたら、鷺が一羽あはたゞしくたつて北浦のはうへ飛んでいつた。

夜。後ろの木立にけうくと鷺の聲がきこえる。

二日

朝。鳥は山をこえる朝の光をみて さめよ さめよ さめよ と呼ぶ。呼ばれてさめるものはこの島に私一人である。さうして、さめて四周の清淨なことを思つて心から満足をおぼえる。潤葉樹の葉ごしに緑の光がさして切るやうな朝の氣が音もなく流れてくる。崖をおりて濱にでる。村の人たちはまだ起きたばかりであらう。湖にも岡にも影がみえない。

食後。棧橋へでる。□□の道を豆ほどの荷馬がゆき、杉窪を菅笠がのぼつてゆくのは蕎麥を刈るのであらう。そのわきには焦茶色の粟畑と水々しい黍畑がみえ、湖邊の稲田は煙るやうに光り、北の岡の雑木の緑に朱を織りませ

た漆までが手に取るやうにみえる。□□も□□も峯のはうはいつしか黄葉しはじめた。曳かれてゆく家畜のやうに列をなして□□から□□へかけて断続した朝の雲がゆく。水の底が遠くまで透けて日光につくられた金色の網がぶわ／＼と揺ぎ、根こぎにされた水草の芽が浮きもせず沈みもせずにゆら／＼と漂ひあるく。

南の岡へゆかうと思つて島をでた。——島には船がなかつた。たま／＼きた船にでもものつて出たのであらう。——豊作さんのそこへよつたらほかほかと湯氣のたつ箕のそばでおばあさんが麥を蒸してゐた。ねせておいて醬油をつくるのだといふ。秣山へゆく道は灌木の岡にそふて陰になり日向になりうね／＼とうねつてゆく。人どほりのないのと小山がせまつてゐるのとで□□の道よりも一層淋しい。たまに行きあふ百姓たちも村の者ではあらうが見

しらぬ顔ばかりである。とある山蔭で粗朶を背負つてくる女にあつた。十六七の瘦せぎすの娘で、まみえと目のあひだにほんのりと上氣して、色白の頬に汗がひとすぢ流れてゐた。彼女は小鳥かなぞのやうにおぢけて、ちらりとみた眼をおとして人の胸のへんにつけながらおづ／＼と過ぎていつた。田の畦や湖ぎはに枸杞もまじつて赤い實が澤山なつてゐるのを、よくみればひとつ／＼に木がちがふ。

秣山——南の岡——は美しい岡である。まどろむやうに横はつた草山のあちらこちらに、落葉したのや、黄葉しかけた灌木が小松の緑にまじつてゐるのが、ちようどいろ／＼の貴い毛皮をもつた獣が自然に睦みあつて草をくつてゐるやうにみえる。羊齒は枯れたが女郎花はまだ咲きのこつてゐる。うす紫の小鈴をつらねた花の名はなにか。松蟲草のなかをゆけば、虻の群が一齊

に羽音をたて、飛びあがる。風が凩いで日は春のやうに暖い。萩、漆はもみぢして、柏の葉がてら／＼と日を照りかへす。あらまし葉を落した山つゞじの灰色の幹が群だつてゐるのも美しい。滑な窪地をとほして帯のやうに雑木が繁つてゐるのは清水の流があるのである。草のうへに横になつてうつとりと眺めてゐると、山々の嶺に雲が自らに湧いて、また自らに消えてゆく。

三日

夜なかから嵐になつた。目をさましたら障子がはづれてゐるので起きて繩でからげた。枝の音、島の根をうつ波の音、吹き落された鳥のあわたゞしい鳴聲がする。

□□嵐が強く吹く日には南の濱は水が濁るので北浦のはうの水を汲む。

夕。一日吹きまくつた南風がぱつたりとやんだ。はつかに日がさして、山も水も静まりかへつてゐる。と思ふまに北風がごう／＼と雨を誘つてきた。湖水に風脚がみえて、日が恐しく暮れてゆく。

四日

朝からしと／＼と雨がふる。

午後。うたゝ寝の夢を板戸をたゝく啄木鳥に呼びさまされた。目ざましに香煎をくふ。焚きつけがなくなつたので裏へいつて杉の葉をひらふ。じつとりと土にくつついてゐるのを拾つては拾つては土間に投げこむうちに山のやうになつた。かうしてひとり暮してゐることが身にしみてうれしい。

夕。雨はやんだが晴れもしない。燈明をともしにゆく。葦の葉のひと葉も

そよがず、入江も淵ももの凄いほど淀んでゐる。山には灰色の雲がきれ／＼にまつはつて小ゆるぎもしない。後ろの木の梢に啄木鳥が二羽もきて競つて叩くのをきくとはなしにき／＼ながらぼんやりと水の底を眺めてゐると、あちらこちらの葦の芽が、水面へはまだなか／＼とどきさうもないのにそれでも穂さきをまつすぐ天のはうへむけて力をこめて突きでやうとしてゐるのを、そんなに日向がい／＼ものかしらと思ふ。湖が光つてかすかに小波がたつてきた。汀がちよろめき、葦がしづかにゆれ、やがて木の葉が蟬の羽のやうにふるへて鳴りはじめる。まつはつてゐた山の雲はいつとはなしにほどけて山をはなれて漂つてゆく。北浦には波がよせながら南の浦は魚の息さへみえるほど澄んでゐる。鴨の群はまだか、鴛鴦はと思つて眺めても、それらしい影もみえない。いつもの漁師が洲のさきから葦のなか舟を曳いてきたので尋

ねたら、水のなかに立つたま／＼ふりかへつて山を見ながら

「いつも今ごろはもう□□に雪がくるのですけれど、さうすれば來ますが、おと／＼ひ貝を探りにいつたら琵琶が崎の入江にま鴨が十羽ほど／＼、鴛鴦もゐりました」

といふ。それは南の岡の隣に琵琶の形に曲りてた岬にそふて、蜥蜴の尾のやうに細く入りこんだ入江である。あの静な草山につ／＼まれた入江に、海のはてから渡つてきて、おのづからなる舟の形にむつみあふ浮寝の鴛鴦よ、古の猶太の神は萬物創造の終にあたつて、すべての色よい鳥の羽の残りをつゞつて羽衣とし、^蜜のやうな愛のいふきにその胸をふくらませて、汝ら美しいめをとづれの游牧者をばこしらへたのであらう。

燈明をあげ、□□の山の雲を残りをししく眺めてかへる。

夜になるとは鷺が島のまはりを鳴きまはる。雨にも風にもならず、月もみえずにしん／＼と不安の闇がふけてゆく。

五日

一日氷のやうな西風がふく。山へ雪がきたのかと思つて出てみたが雪もみえない。西風が吹けば雲をふきはらふと本陣がいつたけれど、ところ／＼青空も透き、日に照された雲もみえながら、おほかたは根づよくへばりついてなか／＼剥げさうにもない。ふと南の浦のはうをみたら一羽の鴨が白つばい胸をみせながら低く舞つてゐた。それをよく見やうと思つてぼさのなかを汀づたひにゆかうとしたら足もとから小鴨が飛びたつた。櫓の實を四つひらふ。三つは栗色に、ひとつは青くつや／＼してゐる。とげのある猪口にはひとつた

のと、二つの猪口なしと、まだ若い細いのと。どん栗をひろつたことがなにか嬉しい。

夕。燈明へゆく。寒い風が灰色の雲をふきながら日が傷ましく暮れてゆく。風が強かつたのでいたやの葉が生枝のまゝあちこちに落ちてゐる。花の咲いた杉の葉を石段でひらふ。本陣が黄爪の鹽おしと菜のゆでたのをもつてきてくれたので鴨の話をしたら、それは一つはよく舞ふ奴で、一つは水をくぐるのが得手なのだ といつた。

夜。どん栗と杉の葉を前にならべて日記をつけてゐるとき南の浦にはさばさと水をうつ音がして鳥の群が降りたらしかつた。月は遠じろく湖水を照しながらこの島へは森に遮られてわづかにきれ／＼の光を投げるばかりである。大木の幹がすく／＼と立つて、月の夜は闇よりも凄じい。

南の濱の木のとこへいつて日にあたる。空が晴れて豊かな日光は濱をあたゝめ、西風は崖と樹木にせかれて高く頭上をこえてゆく。この木は高さ四五丈、まばらな枝に檜の葉に似た濶葉をつけて、根もとにはなにかの古い根つこ二株と、無惨に裂けた枯木の幹が横倒しに水につかつてゐる。南の岡のうへをもちり／＼と浮いてゆく銀色の雲に見とれてゐるとき、一羽の魚狗が背なかを光らせながらびつ／＼と飛んでいった。もし人が思ふまゝに生れかへれるものならば、あの絶壁の生臭い隠れ家に、美しい衣をきて、心にくゝもひとりすむ魚狗になりたいものである。秋はまはりの山の木が落葉するためか、鳥はみなこの島をめがけてねぐらをもとめにくる。

幾日ぶりの天気なのでありたけの器を運びおろして洗ひ、溜めておいた

洗濯をし、水をあびてかへる。さうして自分で今日の勤勉をほめながら、御褒美にすこし早く夕食の用意にかゝつて、味噌汁をつくり、浪華漬をあける。こつとりつゝんだ粕の底からぼくりと西瓜の丸漬がでゝきた。さもうまさうに太い皺がよつてづゝくりと酒の氣がしみてゐるのを、蓋のうへでほどよくきつて皿につける。汁も煮えた。いそ／＼として飯をくふ。

棧橋。今日は岡の木も島の木もいつばいに枝葉をひろげて日光をすひ、鳥居も燈明もめづらしく新しい影を落してゐる。湖畔の岡の東がはにやうやく蔭がひろがつて、晴れた日の太陽はひとしほなごりをしげにたゆたひつゝ沈んでゆく。□□山は日輪の埋もれてゆく墳であらうか、消えがてにする微光をみれば、晴の夕べもまたあはれである。柴舟も畑の農夫もみな歸つたのに、秣山に草をくふ美しい獣の群は、よい草の香に酔ひしれて穴に歸らうともし

ない。

鳥のしわざか鳥の脊に小さな蜆の殻がこぼれてゐた。四つながらみな仰むけに白い裏をみせてゐるのをなにはなしにひとつ／＼裏がへしてみる。水色と泥色に染めわけられた波模様を手のひらにのせてみながら戻つて机のうへにならべておく。どん栗と貝殻と杉の花とで賑になつた机に頬杖をついてぼんやりと魚狗のことをかんがへはじめた。

南風の強くふく日、私は手桶をさげて北浦の水を汲みにいつた。いつものやうにちつと足もとをみつめて思に沈みながら、しづかに小暗い坂道をおりてゆく。大木の枝は幾重にも頭上を蔽ふて、空とぶ鳥もこの姿をみないであらう。幾年となく散りつもつた木の葉はそのまゝ土になつて柔に爪さきをうづめ、踵は餌をねらふ獸のそのやうにすこしの音もたてない。崖の樹木は

水を吸ふ化鳥の形に押しあつて青暗い淵のうへに頸をのばしてゐる。ふと見れば、汀からのりだした朴の木の子にひとりの女が腰をかけて一心に釣を垂れてゐる。翠の髪を肩になびけ、瑠璃の翅を背にたゞみ、泛子をみつめる瞳はつぶらかに玉のごとく、ゆさりとたれたふたつの脛は珊瑚を刻んだかとうたがふ。美豆波か、山姫か、奇しく妙なる姿は底なしの淵の底までも照してゐる。私はおぼえずよろめいて手にした桶をとり落した。彼女は驚いて口笛のやうな叫び聲をあげながら浦づたひに鳥をまはつて龍宮の岬のはうへ飛んでいつた。そのあとに私は温もつた朴の枝に頬をしつけて恍惚として影もない水を眺めてゐた。夕べをもまたず冷えてゆく朴の枝が教へるであらう、無慈悲な釣に捕へられたのは淵にすむ鱒の子ではなくて、私みづからであつたことを。

夜。鴨の聲がしたかと思つて空の光をたよりに濱へおりた。満月が無名樹のまばらな梢にかゝつて、湖畔の岡の裾に霧が幔幕のやうにひいてゐる。たゞひとりこの月に照されて、湖の離れ島のはつかなる濱べに、波をへだて、草ばかりなる彼方の岡を眺めてゐる心は涙といへば涙である。月界の神女は昔ラトモスの山の窟にまだうら若い戀人をいだいてさめることのない甘い眠りにいらせたといふ。私は今ひとりこゝに立つてこのやうにあこがれてゐるのに、彼女はなせはやくきて私を抱いてくれないのであらう。ふるい憧憬の蓮華は清らかな光にあつてふたゞ花びらをひらいた。月天子よ、私は汝のやさしい面を仰いで夜をも明すであらう。妾は苦行の婆羅門のごとく、心は渴仰の信徒のごとく。

七日

夕。一の鳥居へ石段をおりるときふと柴栗の落ちたのをみつけて 栗がなつたな と思つて上をみた。腐つて落ちたいがは毎日目についてゐたが、栗のなつたことはすこしも考へなかつた。高い枝に雫のたれさうな三つ栗がめつきりとゑみわれてゐる。胸を躍らせながら枯枝をひろつて投げつけるうちにだん／＼手心をおぼえてとう／＼うまく打ちあてた。大きないがばかりともげてばら／＼とこぼれるのを飛んでつて草のなかを捜してゐるとき、不意に落ちてきた枯れいがいやといふほど頭を打たれて、なるほど昔の智慧を思ひだして羽織を頭からすつぽりかぶる。ほんのかた手に一杯ほどの栗を袂に入れてきて机のうへにあけたら蟲の粉が美しくちらばつた。

焼山には雪がきたといふ。

八日

三八

本陣が蛇のきもとどす黒い蕎麥粉の饅頭をもつてきてくれた。栗の話をしたら、島の西に大きな栗の木がある。といふので宮の後ろの崖をあとについて降りてゆく。透きまもなく繁りあつた雑木のなかに獰猛な輝だらけの腕をひろげたすばらしい栗の木の姿はあつばれ武者ぶりとはみえるけれど、かんじんの栗は影も形もみせない。

「去年はあふなくて通れないほどなつてたが」

といひながら心あたりの木から木へ捜してあるいてもいが一つ落ちてゐないもので、本陣は手もちぶさたな顔をして、南のはうに梨があるから。といつて崖の腹をまはつてゆく。私は栗のかはりにみち／＼檜の實をひらふ。本陣は、木曾のはうでは檜の實を豆にませて味噌をつくる。とか、山奥へゆけば

榎、かしばみ、山毛櫨の實もくふ。など、話しながら先にたつてゆく。南の崖のしたに一株のげんぼ梨がある。これも「去年は降るほどなつた」さうだが見れば高いところに七つ八つあるばかりだ。下草をかきわけてやつと三つ四つさがしだした。堅くて小いがかをりはなか／＼高い。茶萸、水引の花。

九日

朝なぎの濱にくだる。山々は雲の帳をかゝげ、湖邊の灌木はさながらに乙女となつて朝の姿をうつし、梢にはなに鳥かきてまろらかな鄙歌をうたふ。夕。栗を落す。

十日

三九

北風がひゆう／＼と雪雲をはこんで今夜のうちに湖水が氷りはしまいかと思ふ。かん／＼と火をおこして、栗をむいて栗飯をたく。肩をすぼめて森に吠える雪風の音をきいてゐる。

夜半。思ひがけぬ月の光がかう／＼とさしこんだ。怪鳴の聲。波の音。

十一日

朝。小雨のなかを本陣が菜と雉笛と大きな笹に一杯のしめじをもつてきてくれた。彼は来るたんびになにかしら山里らしい話を積んでくる。しめじはこの邊でいちばんいゝ茸だといふこと、なに茸とかいつて傘の徑が一尺もある氣味のわるいのも食ふといふことなど。

昨夜のうちに山へ雪がきた。□□に三度ふれば里にもくるといふいひつた

へで、村は今草刈のをはり、とりいれのはじまりで大騒だといふ。十二日の秋祭——祭とは名ばかりでこれといふこともない——までに草を刈りをへ、新蕎麥をくひ、收穫をはじめて、霜月のなかばまでにすべての農事をしまひ、それから人たちは身も心ものび／＼として思ひ／＼の温泉へゆく。

棧橋へでてみる。山々は寒さうな雲に埋もれて雪の色さへみえない。風に吹きさかれた霧のきれが目のまへの水のうへをそ／＼とせ／＼つてゆく。

木立ちの路を歸れば、凍えた島のなかに、鴉子鳥がなき、繡眼兒もなく。

この住居のまへにある僅ばかりの平地のむかふは五六丈の急な崖になつて、そのしたが南の濱である。崖には杉の大木にまじつて象皮色の樺の幹があくまでも枝をひろげ、瘤だらけのいたやは犀のやうに立ち、朽ちはてたえのみはおほかた枝葉を落しつくして葛蘿にまかれてゐる。暖い日には障子を

あけて、これらの喬木のをのこどもの雄々しい武者ぶりをみて心をたのしめます。我がちに日光を貪る木々の簇葉は美しい模様を織りだして自然の天幕となり、ところ／＼の透きまからはきれ／＼の空がみえ、その小さな空を横ぎつて銀色の雲のゆくのがみえる。そのなかで前にあるやゝ大きな天幕の裂けめはこの家に天の光を齎す唯一の路である。それゆゑ私には朝は遅く明けて、日は時のまに暮れてゆく。夜になれば無数の巨幹はさながら魑魅となつて人をおびやかす、星は簇葉をもれて一つ二つ冷な木の實のやうにみえる。

午後。晴。濱におりて茸を洗ふ。

夕。落栗をひらふ。三つ四つ。□□、□□、□□の嶺にさら／＼と初雪がふつて、昨日まで恐しげにみえた島の姿がなつかしやかになつた。なごりの雲が去りがてにたゆたふてゐる。水の底にすいてみえるうけのなかへ小さな

魚がしづかにくゞつてゆく。彼はたゞ一夜なれどもこの島の岸べにかゝる安住の宿を見いだした。

うちよせる小波の音をきゝながら小島が崎の洲をあるく。こゝは灌木にはさまれて狭間のやうになつてゐる。まはりの岡はかなり黄葉が深くなつた。あんなにたくさん鳴いてゐた鶯はみんなどこへいつたのかしら。そんな事を思ひながらふと弓なりの枯枝をひろいあげて涙をうかめた。今日はいつになく遅くなつた。山も湖も暗くなり、鳥はみな島に歸つて木の頂にとまつてゐる。

十二日

秋祭。朝本陣が迎ひにきた。

□□の道をあるく。黍畑はいつまでも若々しい緑色をしてゐる。粟畑は濃

い海老色になつてもまだ刈られない。昨日菅笠のみえた邊は一段ほどの稻がふり干しにされてゐる。足の疲れたところからひきかへして村へはひるときちやうど托鉢の尼さんが讀經をへてある家の軒からこちらへくるところであつた。私はなにげなく深い笠のうちをみた。染めたやうな豊かな頬や、讀經のために充血した唇や、岩間を清水の流れでゆく尼僧の境涯には涙なしには住めまいと思ふほどなまめいてゐる。これからどこをまはるのか□□の道のはうへいつた。

かねて招かれてゐた本陣のそこへいつて烏鍋で焼酎をのむ。本陣はすこしばかりの焼酎に酔つて猩々みたいになつて

「先生、もう舟が漕げません」

といふ。で、一時ばかりそこいらを歩いてもどつてみたらやうやく色がさめ

たがまだ鼻をつまらせてゐる。□□風が無二無三に吹く。鼻つまりの猩々は一生懸命臆を押しながらこの風で鱈がとれるからいゝのがあつたらもつてゆかうといふ。幾年もまへに山からくる清水の落ちくちに彼らの最初の鱈をふつた鱈の子は、その父となり母となるときがくるとは、稚いとき乳房をふくむことをしらぬその口にはじめて吸つた清水の味を思ひだして、己が子らにもそれを吸はさうとしておなじ葦邊に寄つてくるのをさし網を沈めてとるのである。四方の山から岡から無数の鳥が島をめがけて歸つてくる。これから山の鳥は雪に追はれて皆この島にあつまるので鳥はいちめん鳥の糞になるが、春になつて雪のとけたあとをみると木の實草の實の種子が敷きつめたやうになつてゐるといふ。

夜になると宮のわきの坊主の木へ怪鳴が二羽もきて、ぐわつくと喉を鳴

らしながら闇のなかを漁りまはる。

十三日

午後。雨のなかを濱へおりて水を汲んで枝豆をうでる。啄木鳥は始終この島を見まはつて人の影さへみればとがめでもするやうに鳴きたてる。この美しい深山の彫師は日々小さな鑿をふるつてまへの夜の夢を木の幹に刻まうとするかのやうにみえる。

本陣が玉菜と里芋としめじをもつてきた。うまさうな葉を十重二十重にかさねた玉菜と、毛むくじやらの里芋と、まだほけない面白い形の茸とが笹のなかで轉りあつてゐる。

本陣は

「また先生のお楽しみものを拾つてきました」

といひながら恵比壽様みたいな顔をして袂から柴栗を二三十だした。またかみさんのさとの味噌漬が三年めとかでよく漬いてるからといつて、茄子と大根の唾のでさうな色に漬いたのをくれた。私が湯をわかし、飯をかけて、漬物をきるあひだに、本陣は玉菜をきざみ、濱へおりて茸と里芋を洗ふ。それから駄菓子をつくつて茶をのみながら、越中越後には處々に尼寺があつて大勢の尼が托鉢にでる。この邊でも佛の忌口にでもあたれば讀經をたのんだり、または宿をかす家もある。などゝ話すうちに飯がふいたので

「どうもおごちさうさまで」

といつて歸つていつた。あとにひとり王侯の富を得たきもちではく／＼しながら、鯉節をかいてつゆをつくり、笹から玉菜と茸をとりだしては投げこむ。

茸がひよく／＼と煮えくりかへる。蓋でおさへつける。なかでこと／＼いふ音をきながら、こゝを離れるのがいやだと思ふ。

鼠が毎晩足高蜘蛛の身だけを食つて足をそこいらへちらけておく。帚がなくて掃けないので澤山たまつた。蜘蛛は食はれても／＼別の奴が相變らず長い脚をもてあましてよい／＼みたいに歩きまはる。

十四日

朝。飯をすませたとこへ本陣がさも一大事らしく

「鱒がとれました／＼」

といひ／＼息せききつて四百めあまりのあめ鱒をさげてきた。今とれたばかりで眼などまだ生きてるやうに光る。腮から荒繩をとほされ、烏天狗みた

いな口をくわつとあけて、鉤なりの鋭い齒をみせてゐる。頭は焼物のやうに黒くてらつき、體は赤黒く光澤を帯びて、美しいといふよりは野趣のある魚である。切身にして味噌につける。

本陣は薪をとつてゆくといつて崖に倒れた朽木を濱へつき落してとん／＼鉦でたゞいてゐる。

午後。南が風いで日がほ／＼とあたつてきた。北風のこないまに濱へおりて米をとぐ。柳の根もとにある穴から蟹が出てきて不思議さうに見てゐるのでそつと指をだしたら、ちかとはさんでそ／＼に穴へはひこんだ。米をとぎをはるころにはもう風がたつてきた。洗濯をし、水をあびて歸る。

晩飯には鱒を煮てくふ。湖水の味がする。

棧橋。湖畔の平地だけをのこして霧がすつかりつゝんでしまつた。晝は稻

を刈り、夜なべには稻こきをすると本陣がいつたが、もう暮れてきたのに田畑にはしきりに人の影がうごいてなにか堆く積まれた。鳥の群が鳴きたて／＼後を追つて歸つてくるのを眺めてゐると、をり／＼雲がきれて思ひがけぬところに夕やけの空がみえたりする。はじめ四方の岡の森のうへに無数のほしがみえ、やがてそれが子子のやうにうごきはじめ、次第に大きくなつて鳥の形になり、終に黒い翼がみえ、聲がきこえて、それは皆この鳥をめがけて歸つてくる鳥だといふことがわかる。鳥こそはまことに鳥族の農夫である。彼らはその強い嘴の鋤をもつて終日耕して倦むことをしらない。それゆゑその衣は美しい紺色に光り、健な唄の聲は野に山にひびきわたる。

一の鳥居をくぐつたところにこの鳥ちゆうでいちばん綺麗な杉の木がある。一抱へほどの幹と三抱へぐらゐるのが根もとから二又になつて、幹にも

枝にも更紗模様をおいたやうに錢苔がはえ、どす黒い葉のなかにいちめん花がさいてゐる。その高い枝のしたに見事にかげられた大きな蜂の巢は毎日こゝへくるときのひとつの楽しみになつてゐる。渦卷の浮彫をした甕のやうな王宮には方々に入口があり、暖い日には緋をどしの鎧をきた幾百の騎士が勇みたつて、湖の彼方には、ゑんで彼らをまつてゐる戀人たちの馨しい唇をすひにゆく。

十五日

歸る日が近づいてからは毎朝目が醒めるとは言知らぬ寂しさが湧いてくる。今日は一人の爺さんが參詣にきて越後の國中頸城郡何村とやらの者だと名のつたあげく

「あんたこゝにかうしておいでになつてなにか行でもなさるのですか。行をなさるには私どもがかうしてお話するのもお邪魔になるといふことですが」といひながらそろ／＼と腰をおろした。私が

「いゝえ行はやりません」

といつたのです。こし落ちついて合點ゆかぬらしく人の様子を見ながら、自分は今申すとほり越後の者でこの村の身うちへ昨日から子供をつれて遊びにきて一晩泊つて今お詣りにきたのだがまたこれから子供をつれて歸らうと思ふなどゝひとりで話してゐる。爺さんはお宮に燈明をあげてきたとみえて

「あぶないから消しておいで」

と子供にいひつけて、まだ臍におちぬらしく、なにをなさる、なにをなさるとくどく尋ねる。私は、都會に生れて都會に飽きたからこんなところに籠つ

たのだ。といゝかげんな返事をした。爺さんはばかりと口をあいてまはりの森や屋根裏を見まはしてゐたが

「やはり夜になればお話においでのことともごわせうな」と變なことをいふ。私がわかりかねた様子をしたもので

「いや昔からかういふところではてんご様や神様がたがきてお話しくださるといふことを承つてをりますで」

といつた。笑ふのも氣の毒と思つて眞面目に

「もうこの節ではあまりさういふことはありません」

といつたらさも感に堪へぬらしく仰山にうなづいて

「天子様がおとめになりますかな」

といつた。さうして孔のあくほど人の顔を見てから

「どうもご失禮申しあげました」

と丁寧にお辭儀をしていつた。子供のじぶんにかいた伯母さんの話によると天狗様は時々こんなことをして人を黽りにくるといふ。まづ／＼お氣にさはるやうなこともいはないでよかつたと思ふ。

今日もまた時雨れてきた。層々と雲のやうに繁りあつた大杉の梢にしらく／＼と雨の脚がみえる。

夕飯の菜に鱒をやき、里芋と玉菜を煮る。

十六日

朝々島を出てゆく鳥の聲に呼びさまされる。眼をあいたらばち／＼と葉をうつ雫の音がした。

降りしきる時雨をきながら栗をむいて栗飯をたく。

夕。今日をかぎりに雨の小やみのひまを棧橋へゆく。岡にも里にもたちこめた霧のたえまから濃い紅葉の色がみえて、人たちは雨にもめげずこの遅くまで稻を刈つてゐる。なごりをしなくていつまでも／＼立つてゐる。

鳥もみな歸つた。稻刈の人も見えなくなつて、霧がそのまゝ闇になつてゆく。今日は兩方の燈明をともし、また棧橋に立つて水にうつる火影がしの字やくの字になるのを眺めてゐる。

十七日

恐しい□□嵐が吹く。朝早く本陣が荷造りにきて一つ一つ舟まで運びおろす。今日は風が強いので舟を小島が崎の入江につないできたといふ。鳥居の

ところへ降りて、汀の杭に繋いだ舟にのつて後の掃除をしてゐる本陣を待つ。島の本は咆えに咆えて、日光に溢れた雲が奔馬のやうに飛んでゆく。

舟をだす。讚むべきかな、島はもみぢして鴛鴦のごとくに見える。この島は國のはじめのころにはおそらくは一羽の鴛鴦鳥だつたのであらう。彼は禍津日の神の嫉にふれてたゞひとりの戀人をうしなひ、嘆きのあまりにかやうな島となつてしまつた。それゆゑ幾千年の後の世の今になつても、秋がきてその子の子らがあの入江にわたつてくるとは、恩愛のきづなにひかれて美しい昔の姿をあらはすのである。

岬をまはるやいなや大きな浪がつゞげまにくるのを舟をかはしく湖畔についた。

大正十二年七月三日

犬

犬

有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害し、その財寶を掠略することをもつて畢生の事業として、紀元一〇〇〇年から一〇二六年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた。いつも十月に首都を發して三ヶ月の不撓の進軍をつづけたのち内地の最富裕な地方に達する慣であつたが、かやうにして印度河から恒河にいたるまでの平原を横行して、市城を陥れ、殿堂偶像を破壊することによつて、彼は「勝利者」「偶像破壊者」の尊稱を得た。溫暖豊滿な南方平野の烏合の衆は、北方山地の勇敢な種

族と中央亞細亞草原の殘忍な騎兵の團結した軍隊の、回教的狂熱と盜賊的貪慾に燃えたつところの攻撃によつて砂礫のやうに蹴散らされてしまつた。徒に驕慢な偶像教徒は兇暴な異教徒のまへに慥伏しつゝも、みじめな敗北者の陰險黒濁な憎惡と悔蔑をもつてひそかに彼らの宗敵を咀つてゐた。

これは一〇一八年にマームードがヒンドスタンの著名なる古都カナウヂのはうへ兵を進めた時のことである。彼の颱風のごとき破壊的進撃の通路にあつてクサカといふ町があつた。彼の軍隊は行軍の都合上そこに宿營した。さうして、奪略、凌辱、殺戮等、型のごとくあらゆる罪惡が行はれたのち、彼らは津浪のやうに町を去つた。

その頃クサカの町から稍遠くはなれた森のなかにひとりの印度教の苦行僧があつた。彼はもと町にあつた相應な天祠の主僧であつたが、回教軍が最初に

こゝを通過した際に祠堂は跡かたもなく焼き拂はれ、偶像は毀たれ、財寶は掠められ、そののち纔に再建されたものも間もなくまたうち壞されて、幾度とない侵入のために終には不幸なその町さへが荒廢しさうな有様になつたので、彼はとう／＼住むべき家もなくなり、その森のなかに形ばかりの草庵を結んでやうやく信仰をつづけてゐたのである。彼はそこへうつつてから思ひ出したやうに苦行をはじめた。それを人々は、彼が不俱戴天の異教徒を滅して、印度教と印度の國を往時の繁榮と光明に蘇らすためのだと噂しあつた。實際北方印度の諸王の同盟軍をさへ粉塵したほど無敵な回教軍に對してはそんな風にも考へるよりほかしかたのないほど彼らは絶望的な状態にあつたのである。そのためにこれまでにはただ世間なみの天祠の主僧に過ぎなかつた彼は——婆羅門の權威と清僧の譽とは正當にもつてゐたのであるが——偶ひ

どい苦境に陥つた愚癡な人々の異常に放縱な迷信的な崇敬をうけることゝなつた。

草庵のそばにはすばらしい檬果樹があつてあたりに枝をひろげてゐる。その逞しい幹におそろしく太い葛蘿が這ひあがつて、ちやうど百足の脚のやうに竝列した無数の纏繞根を出してしつかりと抱きついてゐる。その二つの植物の皮と皮、肉と肉がしつくりとくひあつてゐる様子がなんだか汚しい手足と胴體とが絡みあつてゐるやうないやな感じをあたへる。その蔭に彼は毎日日出から日没まで、一枚の布片、一片の木の葉さへ身につけぬ赤裸のまゝ足を組んでじつと前方を見つめてゐる。間がなすきがな螫しにくる蚊虻その他の毒蟲の刺傷のために全身疣蛙みたいになり、そのうへ牛の爪を鉤なりにしたもので時々五體を搔きむしるので——それは多分なにかの穢はしい邪念を

追ひのけるためであらう——どこもかしこも腫物と瘡蓋と蚯蚓腫れとひつたりだらけで、膿汁と血がだら／＼と流れてゐる。自ら嚴酷な苦行者であつた濕婆はかやうな奇怪な肉體の苛責によつてよろこばされると信じられてゐるのである。見たところ彼は五十前後であらう。苦行に痩せてはゐるが元來頑丈にできた骨格をして、目だつて廣い肩と、太い肋骨のみえる強く張つた胸をもつてゐる。むしやくしやと垂れた白髪まじりの髪は腦天まで禿げあがり、大きな額のまんなか眉間へかけて縦に溝がついて、際立つて高くなつた濃い眉のしたに睫毛のない爛れ眼がどんよりと底光りをしてゐる。厚ぼつたいだぶ／＼した唇、がつしりした顎、膝頭や踝のとびだしたわるく長い脚、彼は髑髏の瓔珞を頸にかけて繫がれた獸のやうに坐つてゐた。

こゝにまたひとりの百姓娘が毎日日の暮れる頃になるとはかならず草庵の

そばをとほつて森の奥へ、さうして暫するとはまたおなじ小路を町のはうへ歸つてゆく。彼女はその路、といふよりは寧ろ人の足あとの行きどまりにある猿神の像に願をかけにくるのであつた。彼女は草を刈り酪をつくるまも忘れることのできぬひとつの惱みをもつてゐたのである。

彼女は不仕合せな孤兒で、ごく幼少の頃から遠い身よりの者の手にひきとられて育てられねばならなかつた。その人達は格別性質が善くないといふ譯ではなかつたが、一般に人間がさういふ場合にあるやうにかなり苛酷で無情だつたので、彼女は物心づいてからろくに人情のやさしみ温かみを味つたことがなかつた。さうして眠る時のほかは殆ど休む暇もない勞役に鍛へられつゝ今度十七の春を迎へようとしてゐるのである。いつたいが丈夫に生れつゝた身體は必要上めき／＼と發達し、一方に境遇上の苦勞や氣づかひはその顔

に明な早熟と孤獨の表情を刻みつけて、彼女を實際の齡よりはよつほどふけてみせた。たゞおのづから流れいづることをとめられたあどなさとなての深い憧憬とが乳房に乳のたまるやうに健な胸の底に熱く溜つてゐた。

彼女は草庵のそばをとほるのがひどく苦になつた。彼女は自分の屬する種姓の卑いことからことに聖者を畏敬してゐた。それははかり知ることのできぬ深い智慧と、徳と、神の寵幸とをもち、また呪術によつて幽鬼の類を驅使し、屢ば行力をもつて諸天の意志をさへ強ひることのできるものだと思つてゐた。彼女は聖者の默想を妨げることがを懼れ、路を埋めてゐる落葉や枯枝の音をたてるのにさへ氣をかねて、跣の足を浮かせながらこそ／＼とそこを通りぬけた。彼女は息をころして一生懸命自分の足もとを見つめてゆく。それゆゑ見える筈はないのだが、なんだか彼がどんよりとすわつた眼でじつと自

分を見送るやうな氣がしてならない。とはいへ聖者は默然として苦行をつゞけてゐた。

そのやうにして幾日かゞ過ぎた。ある日彼女がいつものほり猿神のところから歸つてきたときに、思ひがけなくも聖者は苦行の坐から立ちあがるどころであつた。彼女ははつとして立ちどまつた。太陽は沈みかけてはゐるがなほけばやかな橙黄の光を横ざまに投げかけてゐる。聖者は徐に立ちあがつた。が、足が痺れてゐるのでよろ／＼としてかたへの檬果樹の幹に手をつつばつて身を支へた。

「これ女、そなたは毎日なにをしてくるのぢや」

氣も顛倒した彼女の耳に低くはあるが底力のある太い聲が氣味悪く響いた。彼女はなにかいはふとしたが、頬がふるへ、息がはずんで、頓には言葉

も出なかつた。

「なにをしてくるのかといふのぢや」

彼女は地に跪いて敬禮したのち聲をふるはせながら答へた。

「猿神様へ願がけにゆくのでございます」

聖者は尊大にうなづいた。その時にはもう幹から手をはなしてゐた。さうしてまだともすればよろめかうとする足を踏みはだけて立ちながら彼女の身體をじろ／＼と見まはした。

「それはどういふ願をかけに」

そろ／＼と二足ばかり歩みよつた。さうして頸筋までも赤くなつてちゞこまるのを、疑ぐり深い、意地の悪い眼でじつと見するたが、ことさら聲を和げていつた。

「どういふ願をかけにな」

彼女は當惑して右左に眼をそらしてゐたが、やゝあつて憐みを乞ふやうに聖者を見あげた。長い睫毛のしたに黒い眼がうるんでゐた。

「そのやうにおびえんでもえゝ。わしはそなたを助けてやらうと思ふのぢや」

彼女は途方にくれて、五體を地に投じ、聖者の足に額をつけて、兩手をのばしてその踵をさすつた。聖者はその温みを感じた。彼女はやうやく觀念した。そしてしどろもどろに、かつかつにいつた。

「この子の親にあひたいのでございます」

この子をいふ時にせつなさうに自分の腹に眼をやつた。聖者は愕然とした。

「そなたは身重になつてゐるか。そなたには夫があるか。……いや、そちらは姦淫をしたか」

彼の目は嶮しかつた。

「その男は何者ぢや。どこに居るのぢや」

彼女の顔は蒼白になつた。

「いふてしまへ。わしに隠しだてをするは愚なことぢやぞ」

彼は靜に諭すやうにいつた。が、微塵も違背をゆるさぬ婆羅門の命令的な調子があつた。彼女はわなわたとふるえた。それはどうあつてもいへないことだつた。とはいへどうでもいはなければならなかつた。いかに隠しても聖者の天眼はぢきにそれを看破つてしまふであらう。

「はやういはぬか」

彼女は覺悟をした。

「邪教徒で……」

「なに」

「御免ください。穢されたので……」

彼女はひいと泣きふした。後の言葉は喉のなかで消えてたゞ口ばかり魚のやうに動いた。けれども馬のやうに立つた大きな耳はそれをきゝのがさなかつた。

「馬鹿者めが」

さうして忌はしげに彼女を後目にかけてながら

「こつちやへこい」

と叱るやうにいつて草庵のはうへ歩きだした。彼女はしほくとたちあがつ

た。そして我知らず森の出口のはうを見た。日はもうとつぷりと暮れた。今にも夜にならうとしてゐる。

「早く歸らなくては」

と思ふ。叱責や折檻が眼に浮んでくる。彼女はなにかいひたさうに顔をあげた。さうしてはじめてよく聖者の身體を見た。赤裸で、どす黒く日にやけて、腫物と、瘡蓋と、蚯蚓脹れと、膿と、血とで、雑色の蜥蜴のやうに見える。

彼女は厭惡と崇敬と迷信的な恐怖の混淆した嘔きさうな胸苦しさを覺えて逃げ出した。氣はしながら、憑かれたやうにひきずられて草庵のなかへはひつた。

草庵のなかはまつ暗で、土のいきれとむつとする牛糞の臭ひがこもつてゐた。それはその場處を清淨にするために時々牛糞を地に塗るからであつた。

聖者は神壇のまへにさぐりよつて、火を打つて燈明をともした。ばちくと油のはねる音がして火花がちつてゐたが、それがすむとすうつと焰が立つて急にあたりが明るくなつた。正面の中央には一段高く形ばかりの壇を設けて粗末な濕婆の石像が安置してある。それは聖牛に乗り、鬘の瓔珞をつけて頸に蛇を纏つた五面三眼の像であつた。またかた隅には少しばかりの藁を敷いて茵の形にしてある。それは坐具とも、食卓とも、臥榻ともなるところのもので、その傍には一個の水甕と、木鉢と、油壺と、そのほか日用、祭式用の僅の道具類がおいてある。それで唯さへ狭い草庵のなかはやつと七八人のものが坐るほどの餘地しかない。聖者は藁床のうへに腰をおろして尻込みする彼女をまぢかく坐らせた。さうして落ちついた濁つた低音で説法でもするやうに語りだした。

「これ女、そちはなんといふことをいふのぢや、そちは邪教徒に身を穢され、穢はしい胤まで宿して、そのうへまだ男にあひたいといふか。そちは自分を穢した男が戀しいか。たはけめが。そちがそのやうに思ふ以上はそちは穢されたのではないぞよ。姦淫したも同然ぢやぞよ。そちのやうな者を濕婆は邪教徒と一緒に地獄におとされるぢやある。濕婆がなされずともわしがおとしてやるわ」

彼女はたまらなさうに身をふるはせて泣いた。

「うむ、そちは泣くか。地獄へおちるのが悲しいか。それなら男を思ひきるか。う、思ひきつてしまへ。の、忘れてしまふのぢや。一時の迷ひならゆるされうす。わしはそちが可哀さうぢやによつてゆるしてやる。濕婆の御慈悲も願ふてやる。う、わかつつろ。さあ、わかつたならなにもかも濕婆とわし

のまへで懺悔してしまふのぢや。なにもかも隠さずに」

いやも應もなかつた。が、彼女はいふのが眞實つらかつた。それは拭ひがたい不面目をうちあけることに對する羞耻よりは、寧ろ大事の秘密を暴露することに對する愛惜であつた。根掘り葉掘りきゝほじる聖者に促されて、彼女がとかくいひ淀みながら辛うじて語りおほせたその話はざつとかうであつた。

いつぞやマームードの軍がクサカの町に宿營した時のことである。彼女は日の暮れまへ邪教徒を恐れながら市外の流へ水を汲みに行つた。ところが運悪くも——とその時は思つた——一人の従者をつれた若い邪教徒の隊長——彼女はその男のみなりや供をつれてゐることからさう思つたのである——にばつたりと行きあつた。彼らは彼女を見るや否や兩方から肩先をむづとつか

まへた。さうして隊長のはうが、捕へられた小鳥のやうにわな／＼してゐる彼女の願に手をかけてぐいと自分のはうに仰向かせて、目きゝでもするやうにじつと顔を見つめた。そしてなにか一言二言いつて従者に目くばせした。と、二人して腋下へ腕を入れて吊しあげるやうにぐん／＼とつれてゆく。彼女は「御免なさい。放してください」

と泣きながら嘆願した。彼女は呼んだ。叫んだ。死物狂にあばれた。けれども足が殆ど宙に浮いてゐるのでどうすることもできなかつた。彼らは兎か猫の子でもつかまへたやうに面^白さうに笑ひながら彼女を天幕の澤山張つてあるはうへつれて行つた。小高いところに一本の巨大な榕樹が無数の氣生根を立て、美しい叢林をなしてゐる。その蔭にはかのものからすこしはなれてひとつの天幕がある。そこへ連れこまれた。それが彼らのであつた。彼女はさ

つきからの必死の抗争ですつかり力がぬけてしまつたがそれでもまだ執拗に「歸してください、放してください」

を器械的にくりかへしてゐた。彼女が大人しくなつたのをみて男は従者になにかいつた。従者は

「大丈夫かしら」

といふやうに用心深くそろ／＼と手をはなして入口のところに立ちふさがつた。男は腰をおろして彼女を膝に抱きあげた。さうしてかた手で背後からしつかりとかゝへて、かた手で極度の恐怖のために蒼白くなつてゐる彼女の頬をそつとさすりながら、譯のわからぬ異國の言葉でやさしくなにかいひかけた。それをたぶん

「心配することはない」

とか

「どうもしないから安心しろ」

とかいふのだらうと思つた。そこでやつとすこし氣がおちついて怖々男の顔を見た。彼はまだ二十五六かと思はれた。型のちがつた異國人の顔ではあつたが、眉の濃い、眼の大きな、凜としてどことなし氣品のある顔であつた。彼女はなんとなく

「この人は無體なことはしやしない」

といふ氣がした。いつしか彼女は彼の帯びてゐる綺麗な彎刀に見とれた。その櫛のところには金銀の飾がいつぱいついてゐた。彼はそれを無造作に腰からはづして彼女の手に渡した。そのとき従者がなにかいつたら彼は微笑みながらうなづいてみせた。それを彼女は

「それは名ではないぞ、邪教徒は彼奴らの使ふ悪鬼を呼ぶ時にさういふのちや。そ奴は悪鬼の力でそちの心までたぶらかしてしまふたのちや」

「私はやうやつと立つて歸らうとしました。その人は手をとつて助けてくれました。さうして外に番をしてゐた従者を呼んでなにかいひつけました。従者は苦笑ひしましたが多分いひつけられたとほり私を送つて家の近くまでついできました」

話す彼女よりも聽いてゐる聖者は一層見るも無慘であつた。

「そちの罪業は深いぞよ。明日から七日のあひだ今日の時刻に濕婆にお詫びをしにこい、必ず忘れるなよ。さあ歸れ。穢れた奴」

彼女はもちぐ／＼として立ちかねてゐた。やかましい主人がそれを許してくれるかどうかを氣づかふのであつた。で、恐る／＼その懸念をうちあけた。

「よし。歸つてこのわしがいふたといへ。もしそちをおこさぬやうなれば彼らまでも咀はれるぞと」

彼女はす／＼と草庵を出た。森のそとには月が皎々と照つてゐた。彼女は家へ歸つておづ／＼と一伍一什を話した。さうして最後に聖者のいつた言葉をも附け加へることを忘れなかつた。唯自分が身重になつてゐるといふことだけはいはなかつた。凌辱については已にその當時わかつてゐたので格別のこともなかつたが、日參のことになると主人はいきなり顔の曲るほど彼女をなぐりつけた。暇がかけるのと供養の費えるのが業腹だつたのだ。さうして結局あとからそれだけ餘分に働いて穴埋めをする約束のもとにせうことなしに許した。

彼女は一般に邪教徒のいかなるものであるかは知り過ぎてゐた。それは憎

ひたしてある。彼女は滅入りさうな氣持で目をふせてゐた。

「これは祈禱によつて功德をつけられた水ぢや。これを神像にそゝいで濕婆の怒を鎮め、またそちの身體にふりかけて穢れをすゝぐのぢや。さうして、罪をゆるしてください、身を淨めてください、福德を授けてください、とお願するのぢや、そちは身に著けたものはみな脱いでしまはねばならぬ。さうしてこの燈明の消えるまで祈願をこめるのぢや」

彼女は石像のやうになつて目をみはつた。

「燈明が消えたら歸つてもえゝ。それまでわしは外に出て居らう」

聖者は外から扉をとちて歩み去つた。彼女は耳をすまして足音の遠ざかるのをきいた。さうしてやゝ暫くためらつてゐたがやうやく心をきめて、身に纏つた布片をほどかうとして無意識に神像を見あげた。それが生きて見よう

とでもするかのように。彼女はぐる／＼とほぐしはじめた。立派に發達した肉體が次第々々にあらはれる。彼女は着物をかた寄せておど／＼しながら聖樹の枝をとつて淨水を神像にふりかけた。そして平伏して祈願したのち起きあがつて今度は自分の身體にふりかける。幾度も幾度もくりかへしてゐるうちにやつと氣が落ちついてきた。彼女はもはや猿神に祈つたやうにこの子の親に今一度あはしてとはいはなかつた。教へられたとほり、罪をゆるして、身を淨めて と祈つた。それは眞實一生懸命であつた。とはいへ戀人を棄てよう、忘れよう などゝは露ほども思ひはしなかつた。

皿の油はあまりながくはもたなかつた。けれどもそれがどんなにながく思はれたか。燈明が今にも消えさうになるのをみて彼女は手早く着物をきた。そして濕婆のまへに最後の禮拜をしてほつとして草庵を出た。さうしてその

まゝ歸つてもよいかどうかを疑つて見まはしてゐたときに聖者はどこにゐたのかぢきに姿を現した。

聖者は娘の跪拜をうけたのち草庵に入つた。そこには燃えた油の匂と女の匂がこもつてゐた。彼は燈明をともした。神像が淨水にうるほつて、そのまへにひとすぢの髪の毛が落ちてゐた。彼はやゝ久しくなにか思ひ耽つたのち供養の食物をとつてべちや／＼とうまさうに食べた。

その次の日も聖者はおなじやうに娘を残して草庵を出た。彼は程近い流のところへきた。そこは月が水を照してせい／＼と明るかつた。そこでいつもの淺瀬に降り立つて水浴をした。まだ癒えきらぬ搔き疵がひり／＼と痛んだ。それから彼は岸にあがつて黙想しようとするやうに足を組んで瞑目してゐたが、ぢきに立ちあがつてそこいらを歩きまはつた。彼は終日の苦行に疲れか

つ饑えてゐた。で、また草のうへにべたりと腰をおろして息をつきながらなにかの考に囚はれた。と思ふとまたその邊を落ちつきなくふら／＼と歩きだした。彼は俛首れながら夢遊病者のやうに道つた。夜の鳥が頭上の枝からばさ／＼と飛び立つた。彼ははつと我にかへつた。そしていつのまにか草庵のある空地にきてゐるのに氣がついた。彼は足どめにかゝつたやうに立ち竦んで思案しはじめたが首をふつてもと來た流のはうへ歩きだした。と、またひつかへした。そして二足三足歩いたとおもふとくると身をめぐらした。で、そのまゝ地から生えたやうに立つて苦しげに溜息をついた。彼は脇腹の疵を爪で搔きさばいた。髪の毛をひき掻つた。が、終に萬力で振られるやうにじり／＼と向きなほつた。さうして餌をねらふ獸の形に足音をぬすんで草庵のはうへ忍びよつた。彼は背面の隅の地面に近いところに明りの漏れる小孔を

軍がガーズニーへの歸途再びこゝに宿營することになつて、その先頭の部隊が丁度到着したのである。此度彼の馬蹄が印度の地を踏んでから、向ふところ敵はみな風を望んで降つた。インダス、ヂエーラム、チエナブ、ラヅイ、サトレツヂの諸河は難なく越えられた。彼は鬱茂たるチャングルをとほして「櫛が髪を梳くやうに」進んだ。十二月初め彼はヂヤムナ河に達してマツトウラを陥れ、更に東して同月末カナウヂに達した。七つの塞をもつて固められたガンガ河上の大都市は一日にして攻略された。今や彼は山のごとき戦利品を携へて故國へ凱旋するのである。クサカの住民は唯もう戦々競々としてゐた。併し回教徒は案外おとなしくして格別亂暴な企もしなかつた。それはもはやこの町には破壊すべきひとつの殿堂も、掠奪すべき一個の財寶もないことを知つてゐたからである。

戦争と長途の行軍に汚れた軍隊が續々と入り込んだ。負傷者も多くあつた。そして皆疲れ衰れてゐた。しかも彼らは皆幸福で元氣であつた。彼らは遠征の非常な成功に満足し、故郷の近くなつたことを喜んだ。サルタン・マームードは虎のごとくに驕つてゐた。また戦利品を満載した駱駝と驚くべき多数の捕虜がひつきりなしにはひつてきた。彼らは疲労と絶望とで魂のぬけたやうな様子をしてゐた。この時波斯の奴隸市場は彼らのため供給過多に陥つて、一人の奴隸が二シリングで賣買されたといふ。

娘の心は落ちつきを失つた。彼女は「あの人」が町のどこかに來てゐるやうな氣がしてならない。もしかまだ來てゐないとしてもきつとくるに相違ない。さう思へば矢も楯もたまらなく戀しくなる。さうしていつかうつとりと二人があふところを想像してゐる。

「でももしかして運悪くあの人が！」

彼女ははつとして空想からさめるともうそれが事實であるかのやうにたまらなくなつてしまふ。と、そのそばからまたなにかと造作なくそれをうち消してくれる。「あの人が」が鐵でども出来てゐたかのやうに。

とはいへ彼女は邪教徒に見つかるのをひどく恐れた。彼らは彼女を無事にすてゝはおかないであらう。彼女はもう自分の身體をほかの者には指もさゝせたくないと思ふ。

「私の身體はあの人にさゝげてある。勿體なくてどうされよう」

そんな氣持であつた。

五日めの夜、禮拜をすまして歸らうとした時に聖者はいつになく彼女を草庵のうちへ呼び入れた。

「今日はそちに尋ねることがある。そちは彼奴が二十五六ぢやといふたな」

「はい」

「眉の濃い、眼の大きな奴ぢやといふたな」

「はい」

「そのほかなんぞ見覚えがあるか」

「背のすらりと高い、品のいゝ、強さうな……」

彼女は男の立派な風采について語るのが嬉しかつた。

「左手の小指に怪我をして、さうしてやつぱし怪我のためかすこし跛をひくやうにしてゐました」

・聖者は唇を噛んでなにかの考に囚はれてゐた。彼女は彼が今更どうしてそんなことをきくのかしらと思つた。

「それともひよつとして」

彼女は疑ぐり深く聖者の顔を見た。彼はふと氣がついた。そしてへどもどして

「うむ、そ奴ではない。邪教徒めらは折ふしこゝへもくる。そ奴とはちがふてゐた。そ奴でも懺悔さへすればわしは赦してやる」

そんなとりとめのないことをいつた。彼女は不安と期待に心を亂しながら家へ歸つた。

あとに聖者はひとり瞋恚の焰をもちながら今日の出来事を考へた。二人の邪教徒の隊長が従者をつれて多分狩獵のために森へはひつてきた。そのうちひとりが偶そこに行をしてゐる彼を見つけて偶像教徒に對する回教徒的嫌惡からその顔にぱつと唾を吐きかけた。——打殺されなかつたのが仕合せだ

つたらう——彼はかつとして見あげたがどうすることも出来なかつた。相手は見かへりもせずそのまゝ事もなげに語りあつてゆく。彼は無念骨髓に徹していつまでもくその後姿を見送つてゐた。それは二十五六の、眉の濃い、眼の大きい、頗る風采の好い男だつた。そして腰に黄金造の彎刀を帯びてゐた。彼は　もしや　と思つた。併し唯それだけではあまり根據が薄弱であつた。それにもかゝはらず彼はどうぞしてその男が娘を穢した奴であつてくれゝばよいと思つた。それは實に思ふもたまらないことであつた。そしてそれだけ一層さうしたかつた。彼は娘のいふ男をいくら憎んでも憎み足りないものにしたかつた。そして咀ひに咀つてやりたかつた。

暫して彼は森の奥で彼らの一人がその友を呼ぶらしい聲をかすかにきいた。そしてぎくりとして耳をそばだてた。

娘の歸つたあとで聖者は思つた。

九六

「彼奴だ」

「確に小指がなかつた。さうして跛をひいてゐた」

それは娘があゝまで慕ふのも尤だと思ふほど立派な男だつた。彼は娘が男について語つた時のうつとりとした様子を思ひ出した。彼は彼女のまへにいかにも邪教徒を罵るとしてもその男を醜い奴といふことはどうしても出来なかつた。さうしてその點が何よりも先づ娘の心を虜にしたのだと思ふとなほさらたまらなくなつた。彼は彼女の口からきいたその時の有様、己を塵、芥とも思はぬ今日の不敵の振舞を思つて全身の血を湧かした。彼は五體をふるはせて齒がみをした。彼は婆羅門の忿怒と苦行僧の嫉妬に燃えた。

第六日。夜はふけた。ヂエラルはひどく酔つた戦友と一緒に天幕の外へ出

た。そこで互に上機嫌で別れをつげたのち彼は従者に命じて客人を見送らせた。彼は戦友の高調子な話し聲のきこえなくなるまでそこに立つてゐた。綺麗に晴れた夜であつた。茫漠とした平野に大きな深い空が紺黒に蔽ひかかつて、地平線に近く片輪になつた月が赤くどんよりと沈みかゝつてゐる。彼はひとつ欠伸をして天幕へはひつた。彼は戦友と重に昨日の狩獵やカナウヂの攻略について語りながら徴發した甘蔗酒を汲みかはした。で、蹠くほどではないがだいたい酔つてゐた。彼は年はまだ若かつたが身分の高い勇敢な騎士であつた。さうして今度の遠征にも度々拔群な働をして敵味方に驍勇を示したし、獲物も運びきれぬほどあつた。赫々たる功名と戦果は彼の心を此上なく幸福にした。

彼はふとこのまへこゝに宿營した時に慰んだ娘のことを思ひ出した。

九七

「可愛い奴だつた。つかまへられて蟻蛸みたいに跳ねをつた。だが己はあとで可哀想になつた。さうして歸してやる時ちよつと名残惜しいやうな氣がしたのはへんだつた。とにかく可愛い、いゝ奴だつた。自惚かもしれないぬが奴己に惚れたやうな様子もみえた」

なんだかもう一度あつてみたいやうな氣もした。

「ひよつとしてまたこゝらあたりへくればいゝが。併し明日は多分出發せねばなるまい。後續の部隊も大概ついたやうだから」

それから彼は退屈な行軍について考へた。さうして最後に狂喜と歡呼をもつて迎へる故國の人々を。死のやうに静な天幕のなかで彼は卓子に頬杖をついてぼんやりとそんなことを思つてゐた。その時彼はなにか人のけはひがしたやうな氣がしたので顔をあげて鎖した入口のはうを見た。

「あれが歸つてきたのかな。すこし早すぎるが」

見ると天幕が内へふくらんでゐる。

「酔つばらつてるんだらう。それにしてもうんともすつともいはないのはをかしい」

そこで ひとつおどかしてやれ と思つて

「誰だ」

と怒鳴つてみた。黙つてゐる。いよゝゝぐんぐん押しはひらうとする。押し倒してしまひさうな勢だ。

「誰だ」

彼は立ちあがつて入口のはうへ歩み寄つた。さうして鎖しの紐をほどいて顔を出すや否や

「あつ」

一〇〇

といつてとびのいた。と、解き放たれた入口からぬうつと變なものがはいつてきた。それは確に人間の形はしてゐるが素裸で、全身紫色にうだ腫れて、むつとするいやな臭ひがする。そしてつぶつた目から汁が流れだしてゐる。腐れかゝつた屍骸なら戦場で見飽きてゐるがこれは生きて歩いてゐる。

「なんだ貴様は。化物か。死神か」

相手は黙りこくつて盲滅法に、しかもまともに彼のほうへ、ぎくしやくぎくしやくと關節病者みたいな足どりで寄つてくる。手には研ぎすました小刀を握つて居る。ヂエラルは覺えず身をひいた。

「何者だ。なんとかいへ」

相手はかな鬢ですこしも感じない。ヂエラルは廣くもない天幕のなかを卓

子をまはつて二回までも後じさりした。相手は正確に彼の足跡を踏んでひた寄りに寄つてくる。彼は未だ嘗て知らなかつた感情——恐怖——に襲はれた。彼はこのえたいのしれぬ敵に對してどうしてよいかわからなかつた。そのとき偶然手が刀櫛にさはつたので彼は殆ど無意識に彎刀をひき抜いた。が、狼狽して相手を梨割りにはせずに、脹らんだ腹をめがけて力一杯に突いた。幸ぶつりと突きとほつた。熟れた瓜みたいに柔かつた。相手はどさりと倒れると思ひのほかすこし刀に支へられると見えただばかりで、前とおなじ歩調で、しかも盤石のやうな力でそのまゝ眞直に歩いてくる。そのために刀が櫛もとまでとほつて背中へ突きぬけた。そしてヂエラルが刀をぬかう／＼とあせつてゐるうちに相手は突然痙攣的に右手をあげて小刀をぐさと彼の胸に突きさした。ヂエラルはどうと倒れた。そのうへ、折重つて化物の屍骸が。

一〇一

第七日。娘は二重の意味で今日が待ちどほしかつた。それは満願の日であるゆゑに、また何故かは知らずいやでならない日參の終る日であるゆゑに。で、いつになくいそ／＼として出かけた。彼女を迎へ入れた聖者はいつものとほり燈明をともしたがそのまゝ徐に話しかけた。

「これ女、邪教徒らはまだ町に居るか」

「はい」

「皆居らうな。少しはたつたものもあるか」

「いゝえ。でも明日はたつのではないかと思ひます。昨夜夜中から大騒ぎをして、さうして今日暮れ方あの大きな榕樹のところに……」涙が彼女をさまたげた。「……集つてなにかお祭のやうなことをしてゐました。怖いので誰もそばへ行つて見たものはありませんが、きつと出發の支度が出来たのであ

つちの神様を祭つてゐるのだらうと皆がいつてゐました」

聖者は大きくうなづいてじつとなにか考へてゐる。彼女は「あの人」が必その中にゐて、さうして明日はほかのものと一緒に行つてしまふやうな氣がして胸一杯になつた。

「畜生めらが。早う行つてしまへ」

やゝあつて聖者はぼやけたやうにいつた。

「今夜はいよ／＼そちの身も淨まるぞ」

「……………」

「濕婆のお告があつた……」

「ありがたうございます」

彼女は合掌してわづかに身をこどめた。

「これで満願ぢや。氣を確にもてよ」

「はい」

「濕婆のお告ぢや。その腹の子をおろせといふ」

「ひえつ」

彼女はまつ蒼になつてわな／＼とふるへた。そしてわつと泣きふした。

「どうぞそれだけは、お願でございます。聖者様、お慈悲でございます。そればかりは御免くださいませ」

「たはけめが。そちは子がかはえゝのぢやな。これ、よう考へてみいよ。それは邪教徒の胤ぢやぞ。畜生の子ぢやぞ。そちは起水のついた畜生が腹のなかへしこんでいつた血の塊がいとしいか。そちは腹から穢れて居るのぢや。畜生の血臭くなつて居るのぢや。その子は口が耳まで裂けてゐやうぞ。尻尾

が生へてゐやうぞ。おろしてしまへ。いやといへば必定地獄ぢやぞよ」

「それはご無體でございます。この子は私の子でございます。誰の子でもありません。この子はどうしてもはなされませぬ」

「さて／＼情のこはい女め。そちは地獄が恐しうはないか」

「私は地獄へ墮ちてもいとひませぬ。それだけはおゆるしなされてくださいませ」

「ゆるせといふてそれがわしにできることか。お告ぢやぞ。さあどうぢや。おびえることはない。わしが按排ようしてやる」

「いえ／＼とんでもない。私は神様をお願いいたします」

「神の仰せはわしがりつぐのぢや。わしのいふことは即ち濕婆の神意ぢや。どれ」

彼は醜惡ではあるが悲痛な様子をした。

「さういふめにあつてみたい。一日でもえゝ。たゞの一遍でもえゝ。おゝ、
なんたらうまさうな身體ぢやある」

そこで身をかゞめていひきかせるやうにいつた。

「これ娘、わしはどうでもそなたをはなしはせぬぞよ」

「わしは此娘をひとにとられぬ様にせにやならぬ。若い男はいくらも居る。
あゝ」

彼は悶えた。泣きだしさうな顔をした。さうして久しいこと思案してゐた
が終になにか思ひ浮んだらしくひとりうなづいた。

「さうぢや。わしはこれの姿をかへてしまはふ。ふびんぢやがしかたがない。
わしらは畜生になつて添ひとげるまでぢや。よもやまことの畜生に見かへら

れもすまい。若い男も寄りつかぬぢやある」

□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。
□□□□。□□□□。□□□□。□□□□。

ふいた。そこには彼女を切つても切れぬ自分のものとしたうへの安心と落ちつきがあつた。彼は彼女の身體をあちこちと軽く嗅ぎまはしたのちいつた。「目がさめたかな。わしもようねた」

奇妙なことにそれは犬の言葉ではなかつた。また人間の言葉でも。いはゞ人間の言葉を犬の舌で發音した獸人の言葉であつた。その人畜いづれにも通じない言葉がすら／＼と彼女にわかつた。彼らはまさしく獸人だつたのである。僧犬のこの短い言葉の調子には自分が彼女の所有者であるといふ意識と、所有した女に對するうちとけた馴れ／＼しさがあらはれてゐた。彼女は蟲唾か發するほどいやだつた。

「そなたはひもじうはないか。あれを食べたらどうじやな」

さういつて供養の食物のはうへ目ませをした。彼女は胎兒を食つたし、そ

れに今はそれどころではなかつたので ほしくない といつた。

「それではわしが食べよう」

僧犬は木皿へ鼻をつゝ込んでべちや／＼とたべはじめた。さうして見る見るきれいにさらへて皿をあちこちに轉がしながらべろ／＼となめまはした。彼女は知らぬまに理不盡に與へられたこの境涯と伴侶とをどうしてもすなほにうけ入れることができなかった。それでまた烈しく泣き叫んだ。

「何事も濕婆の思召しぢや。わしらはありがたくいたゞくまでぢや」

いひながら僧犬は口のまはりを手ぎはよく舌で掃除した。それからどさりと尻もちをついて、後ろへ振ぢむいてがち／＼と齒を噛み合せながら尻尾のつけ根にこびりついた瘡蓋を搔きはじめた。彼にはさしあたり強ひて彼女を説得しようとするほどの熱心もなかつた。

「どうでももう己のものだ。いつでも自由になる」

さうした下劣な無關心があつた。

「わしらは人間ではつれ添ふことができないんだ。それでこのやうにしてください。されたのぢや。もう婆羅門も吠奢もない。わしらは濕婆にめあはされた立派な夫婦ぢや」

犬になると同時に彼が婆羅門であり聖者であることに對する彼女の崇敬は彼の「強さ」に對する動物的な「恐れ」と處をかへた。唯彼の智慧に對する盲目的、習慣的な信賴のみはもとのまゝに残つてゐた。それで彼の言ふことをそのまゝ信じたところで、彼女には餘儀ない運命に對するすてばちなあきらめのほかなにもなかつた。さうしてあきらめようとすればするほど生憎に彼が厭はしかつた。

外には鳥の聲がきこえた。

「わしはちよつとそこまで行つてくる。そなたは身體が大事ぢや。ま少しさうしとるがえゝ」

實際彼女は大儀で起きあがる氣にもなれなかつた。僧犬は鼻の先で草庵の藁を押し分けて出ていつた。彼女はひとりになつてしみじみとあたりを見まはした。自分が畜生になつたばかりではほかのものは冷酷にもとのまゝである。濕婆の像も、水甕も、みな。たゞ脱がされた彼女の着物と、不用になつた鬘の瓔珞とがちらばつてゐた。彼女はせめて僧犬がそばにゐないことが嬉しかつた。さうして底しれぬ悲嘆のうちに綺麗にしん／＼と戀の湧き起るのを覺えた。

「あの人は今日たつてゆくのぢやないかしら。私はどうしてもあの人がある

やならぬ」

あの不自然な出産のあとであるにかゝはらず彼女の健康は奇蹟的に速に恢復した。それは所謂根の薬のせいもあつたであらうが、一つには彼女が人間ではなくて犬であつたからでもあつた。翌日の午後彼女は空腹に堪へかねて産後の疲れをおして僧犬と一緒にクサカの焼け跡へ餌を漁りに出かけた。彼女は通ひなれた道をはじめ四つの足で歩いた。そして太い尻尾をきゅつと巻きあげてゆく僧犬のあとからだらりと尾を垂れてしほ／＼とついていつた。森を出て彼女は町のはうを眺めた。町はあとかたもなくなつて此處彼處に餘煙があがつてゐる。さうして遙に物の焼けた臭ひ、特に屍體の焼けた一種かうばしい臭ひが漂つてゐる。終に焼け跡へきた。ぶす／＼燻る灰燼のなかにまつ黒になつた屍體がちらばつて、それを野犬の群が争つて食つてゐ

る。それらのものは彼ら、殊に僧犬の大きいのに驚いて——彼らは犬にしては最も大きな犬であつた——遠くから煩く吠えたてた。それらは彼女たちを自分らと同じ齒や爪をもつたお仲間うちとして、人間や他の動物に對するのとは別の、もつと近接した關係、もつと切實な意味に於ての恐怖や敵意を示した。彼女は情ない思をした。僧犬はそんなことには一切無頓着にみえた。彼には何物もうち消すことのできぬ、何物をも忘れさせる大きな喜——彼女をわがものにしたといふ——があつた。それはさうと現實にひし／＼と迫つてくる饑餓は否應なしに彼女を驅つてその不愉快な場處をあちこちと嗅きまはらせた。彼女は少しづつ、の食物を見つけて辛うじて腹をみたすことができた。そこで腰をおろして休みながら後足で耳のうしろを搔きはじめた。僧犬はいふ。

「このとほりでもわしらはこれから始終こゝで餌をあさるといふ譯にはゆかぬ。どこぞはかへ宿がへをせねば。それでわしの考ではチャクチャの町がよからうかと思ふ。えゝかげんな町ぢやし、それにこゝからはまづいちばん近いで」

彼が同意を求めらるやうに彼女を見たので　どこでもかまはない　と氣のない返事をした。

「あそこに見える森をまはつて、それからひとつ丘を越えて、三拘盧舎たらずもあるぢやろか。そなたにはまんだちと難儀ぢやらうな」

彼女は　今のぶんならどうぞかうぞ歩けさうだからこれからすぐ行かうといつた。歸るにしてもどうせ歩くのだし、それにあの草庵がいやでならぬい。で、とにかく行くことにした。

彼女は焼野が原となつたもとの住みかを名残惜しく眺めやつた。それからとぼ／＼と歩きだした。いよ／＼焼け跡を出ようとする時にそこに運よく逃げのびて邪教徒の毒手を免れた僅の人たちが集まつてゐた。彼らは邪教徒の去つたのをみて三々五々に戻つてきた。さうして目前に慘澹たる光景を見ながら性懲りもなくまたこの見込まれたやうな處に彼らの住居をさだめようとしてゐるのである。彼女は彼らのそばを通らうとして抑へがたいものいひたさの衝動を感じた。彼女は自分ひとりの胸に疊んでおくにはあまりに多くの思をもつてゐた。で、僧犬があはてゝとめようとしたかひもなく彼女は我を忘れてあられもない獸人の言葉をもつて彼らに話しかけた。彼らは肝をつぶして彼女をみた。氣味のわるい謹語みたいなことをいふ狐色の牝犬を。さうしてかやうな際にはあり、彼らはてつきり彼女に魔が憑いたのだと考へて、

彼女を打ち殺さうとてんでに石ころや棒きれをもつて追つかけてきた。彼女は僧犬と一緒に命からかく逃げだした。彼女は自分の境涯のなんであるかをしみじみと知った。

彼らは市外の森についてまはつてから一つの川の渡渉場——それは聖者が浴をとり、彼女が水を汲みなれたその同じ流の下流にあたつてゐる——をわたり、一つの丘を越え、幾つにも枝わかれした路をとほつて、日の暮れる頃やうやくチャクチャの町へついた。そこで彼らはやはり邪教徒に破壊された天祠の廢墟を見つけてそこに住むことにした。崩れ落ちた瓦石の蔭にちやうど雨露を凌ぐに恰好な空洞が出来て、まだほかの獸の匂もしなかつたし、それに一方口で安全であつた。彼らはそこに疲れた四肢をやすめた。

ほかの犬に對する懸念から彼らは毎日つれだつて食をあさりに出かけた。

彼女は人懐しかに堪へずしばしば立ちどまつてはじつと人の顔を見つめ、またその話に耳を傾けた。

「あゝものがいひたい。もとの姿になりたい」

そればかりが思であつた。人々のなかには時には食物を投げ與へ、また稀には愛撫してくれるものさへあつた。そんな時に彼女はいかに嬉しげに耳を垂れ、尾を振り、身をすりつけてその感謝と思慕の情を示さうとしたか。たゞ彼女はあの苦い經驗に懲りてどこまでも本物の犬であることを忘れなかつた。僧犬はそのやうに彼女が人間に狎れ親しむことの危険を懇々と説き、かせた。それは至極尤なことであつたが、彼がさうする眞の動機は實は別にあつた。彼には人間に對する彼女のさうした態度は己に對する冷淡、嫌忌の反映であるやうに思はれて、よしそれが性的なものでないまでも彼に邪な嫉妬

を起させたのである。

くよくよとみじめな犬の日を送るうちに彼女にとつてつらいことがはじまつた。それは當然早晩起るべきことで、しかも彼女が故らにそれを忘れ、若くは忘れたことにしてゐたところのものであつた。僧犬は彼女に□□□□迫りだした。最初のうちは産後まだ身體が本復しないといふ口實のもとにどうやら一日のがれをしてゐたが、それはいつまでもはとほらなかつた。僧犬は□□□□□□□□□□いつた。

「そなたは嘘をいふてゐる。そなたの身體はもうはい本復してゐる。わしにはちやんとわかつとるのぢや」

彼は異性を嗜む者の忍耐と、根氣と、熱心をもつて諄々と彼女を説きはじめた。

「譯のわからぬことをいふものではない。二人は濕婆にめあはされた夫婦ぢや。わしの永年の信心と苦行が思召しにかなうたがゆるゑにそれそのかはえ、そなたをわしにくだされたのぢや」

こゝまでいつて彼は苦しげな様子をした。彼は自分のいふことが赤嘘であることについてはさしてなにも感じなかつたが、己が彼女に授けられたものだといはうとしてどうしても巧い理由が見つからなかつたのだ。

「そなたはわしに授けられた。即わしがそなたに授けられたのぢや。よくよく深い宿縁ぢや。二人は切つても切れぬなぢや。う、濕婆がさうおきめなされたのぢや。う、濕婆の思召しはありがたういただかにやならぬ。夫婦□□□□□□□□はとりもなほさずあなたへのおつとめぢや。道ぢや。また樂しみの隨一ぢや。そなたにはむつかしいかしらぬが、そなたは平生リングを拜

傷ましい日が幾日かつゞいた。ある夜の明けがた彼女はふと戀人の夢をみた。それは彼女の見たれた印度の町ではなくて異教徒の國である。そこには異教徒の男女が蟻のやうに群つて凱旋の軍隊を迎へてゐる。彼女はそのなかにまじつて自分も異教徒であつたかのやうに平氣で「あの人」を待つてゐる。と、ちやうどそこへ約束したやうに「あの人」の姿が現れた。よく夢にあるやうに。彼は一隊の騎兵の先頭にたつて立派な栗毛の馬に乗つてゐる。そしてびか／＼する甲冑をつけてすばらしい長い鎗をもつてゐる。彼女が嬉しまぎれにかけよつて鞍にとびつくと彼は別段驚いた様子もなく

「知つてるよ」

といふやうに笑ひながら彼女を抱きあげた。馬にのつて鎗をもつてゐるくせにどうしてかひよいと造作なくかゝへた。そこで一生懸命にからみついで口つ

けようとすると思つて生憎する／＼とすべり落ちる。やつとこさと這ひあがつて口つけようとするとはまたする／＼とおつこちる。じれつたい思をして幾度も／＼そんなことをくりかへしてゐるうちにかのはずみでふわ／＼と鞍から轉げ落ちたと思つてはつと目がさめた。彼女は今の今とうつてかはつた自分の周圍を眺めた。さうして啼き叫ばうとしたが、そばにゐる僧犬を見て聲をのんだ。氣ちがひのやうな□□に疲れて、横つ倒しに四肢を投げだしていざたなく眠つてゐる。彼女は夢に見た人が戀しくて矢も楯もたまらなくなつた。

「私はガーズニーへゆかう」

彼女はガーズニーの名をきいてゐた。そこは異教徒の王様の都だといふことも。あの道をあの方角へ行くのだといふことも。もう神意もなにもなかつた。たゞ戀のみがあつた。

「あゝ、私は行かう。どうしても行かう。私は命がけで行かう。どうかして途中で死んだつてかうしてゐるよりはましだ。私はどうしても行く。どうしたつて行く。駱駝の足あとを嗅いで行けば行けないことはない。あんなにたんと駱駝が通つたんだもの。それにあの車の轍や馬の足あとでもわかるだらう。……でも私はこの姿で……」

彼女は當惑した。

「いえ／＼どうだつてかまはない。ものがいへなくても、私だといふことがわからなくても、私はそばにゐさへすればいい。顔を見るだけでも、聲をきくだけでもいい。私は尾を振つて、あまえて、あの人の手をなめよう。私はこの姿でせいっぱいのことをしよう。あの人はきつと私を可愛がつてくれるにちがひない。あゝ、さうしよう。私はあの人のところへ行かう」

クサカまでの道は彼女が人間であつてはとてできないほどかなりはつきりと覚えてゐる。彼女は僧犬を見た。正體もなく寝込んでゐる。彼女は息をころしてそつと身を起した。そして忍び足に、僧犬の目ざとい動物の眠りをさますことなしに首尾よく住みかをぬけだした。外はまだ暗かつた。彼女は今こそ天恵となつた鋭敏な犬の感官を極度に働かせて出来るだけ速くクサカのはうへかけだした。彼女はあせつたけれど路のわかれたところへくるとは間違なく方向をきめるために暫くは躊躇しなければならなかつた。彼女は氣が氣でなかつた。僧犬が目をさますまでにせめてあの川を越してしまはねばならぬ。追ひつかれぬうちに、早く早く。彼女はひた走りに走つた。幸に道も間違はず、夜のしら／＼とあけるころ川岸へついた。彼女はそこですこし息をつかねばならなかつた。そして汀から頸をのばして水をのまうとした。その

とき彼女は後ろのはうにばた／＼といふ足音とはげしい息づかひをきいた。

「もうだめだ」

と彼女は思つた。

「くやしい。くやしい。私は逃げそくなつてしまつた」

僧犬は半狂亂で駈けつけた。凄しい形相をしてゐる。肉交の相手を失はうとする時の醜惡な忿怒だ。

「ごめんなさい」

彼女は尻尾を後足の間へ巻き込んでちゞこまつてしまつた。僧犬は猛りたつて無性にはつぱつと砂を蹴上げた。彼はどうして自分の感情をあらはしてよいかわからなかつた。勿論この際彼女の立場になつて考へるなどは思ひもよらない。自分があゝまで熱愛して——全然肉的にはあるけれども——一生

の幸福をそこにかけてゐる相手が無情にも自分の寢息をうかゞつて逃亡しようとする。彼はくやしさ、腹立たしさにふるへた。女の肉がくひちぎつてやりたかつた。けれどもさうすればもうあゝした楽しみはできなくなる。僧犬のなかの人間がそんなことを考へた。で、さういふ場合人間、殊に自分の弱點を知つてゐる人間が賢くも示すことのある寛容と忍耐とをもつていつた。

「なせ逃げたのぢや」

彼女は吃り／＼答へた。

「クサカの様子が見たくなつて……私はすぐ歸るつもりだつたのです」

嘘なことはわかつてゐた。が、それを本當にしてつれて歸るよりほかしかたがなかつた。

「馬鹿者が。クサカなど見てどうする」

そのまゝ彼らはチャクチャの住みかへ歸つた。

それからまた僧犬にとつては極樂の、彼女にとつては生きながらの地獄の生活がつゞいた。彼女は逃げたいといふ氣は寸時もやまなかつたけれど逃げる望はまつたくなかつた。僧犬はその後それについて一言もいはなかつたがあれ以來すこしも氣をゆるさない。それにあの時の恐しさもまた彼女に再擧の勇氣を失はしてしまつた。

「今度こそ噛み殺されてしまふだらう」

彼女は命が惜しかつた。それは單に生命に對する本能的な執着ばかりでなく、さうなれば「あの人」と未來永劫あへなくなつてしまふ——と彼女は思つた——のがたまらなかつた。彼女は未練にも、生きてさへゐればいつかはまた「あの人」の顔なりと見、聲なりときく時が來ないとも限らないと思ふ。そ

のうへ生憎彼女はあの夜と同じ夢をくりかへしく見るのであつた。それはさめればいつも堪へがたい思をさせたけれど、それでも見ないよりはよつぽどましであつた。彼女はそんな夢が見られるだけでも生きてゐたかつた。戀するものゝ常として夢のなかの戀人はその貴さ、大事さ、……に於てすこしも現の人にちがはなかつた。彼女はその夢を嬉しくわが胸に秘めてひとりで思ひかへしてゐた。人しれぬ逢ふ瀬の、ちのやうに。そんなにしてゐるうちに彼女はいつか自分が身重になつたことに氣がついた。彼女は切つても切れぬ強靱な、汚しい肉繩で僧犬と自分がしつかりと結びつけられてしまつたやうな氣がした。それはひつ張ればひつ張るほど飴みたいのにびてきてどうしてもちぎれない。いやな、因果な、宿命的なものだ。彼女はまつ黒な、どろろとした悲しみに沈んだ。嘗て「あの人」の子をもつた場合の回想などは勿論毫も

た。さうしてなんともいひやうのない情愛が、味となり、匂となつて、舌や鼻から全身にしみこんできた。うとく／＼してゐた僧犬は目をさましてすぐに事態を見てとつた。

「おゝ生まれたか。お手柄ぢやつたの」

流石に彼も父親としての情愛を覺えて、歩みよつて子どもをなめようとした。

「あ、その口でなめられちや」

と彼女は思つた。併しやつぱり嬉しかつた。そのうちにまたびよこりと生まれた。暫くして三番めのが。さうして最後に第四のものが生まれて依怙最負のない母の愛撫をうけた。これらの四個の肉塊が尻からひり出されると同時に彼女の世界は一變した。恰も世界がその四個のものに收縮してしまつた

かのやうに彼女の心がそこに集中した。彼女は幸福であつた。もしそれが幸福ならば。子どもは目が見えないのでめくら滅法に乳くびをさぐりあてゝはちゆう／＼と吸ひつく。裸の、敏感な、愛情にうづく／＼と吸はれるのがぞく／＼口にふくまれ、すべつこい舌にまかれて、べちよ／＼と吸はれるのがぞく／＼するほど嬉しい。彼らは胎内にゐた時からすつかり彼女に信頼しきつて、そして 目は見えなくてもちやんと知つてますよ といふやうに些の疑念もなく慕ひよつて鈴なりになる。彼女は自分の愛情が、湧いて、煮えて、甘い乳となつて、とく／＼と彼らの口に送り入つて、その五體にまんべんなく行きわたつて、それを養ひ育て、ゆくのを感じる。母性の酣醉はあれほど自分の變形を嘆いた彼女に生れた仔が四つ足であることを忘れさせた。彼女はまたその抑へきれない母の矜と喜を相手かまはずわかちたい氣持であつた。そこ

で僧犬は二重の満足を得た。子供の出生に對する父としてのそれと、その仔が不意に無心に齎したところの彼女との融和に對するそれと。

子供が心配なのでそれから彼らは交替で食を求めに出ることにした。僧犬は彼女の逃走についてはもうすこしも懸念しなかつた。子供をおいてゆけぬことは目に見えてゐたので。ある日彼は子供に乳をやつてゐる彼女にむかつていつた。

「どうぢや。夫婦といふものゝうまみがようわかつたぢやらう。わしがいふことをきゝさへすればこの楽しみぢや。これはわしらが血の塊ぞよ。かはゆかろ。わしもかはえてたまらん。これからはつまらぬ駄々はこねぬものぞい」
彼はにた／＼笑つて彼女の顔を見た。彼には勝ちほこつた氣持とこれから先の性交の豫感があつた。彼女は黙つてゐた。なんともいふ氣にならなかつ

た。今までたゞ盲目に働いてゐた母性、有頂天に跳躍してゐた愛情が突然ひどい衝撃をうけた。彼女は自分の腹にくつゝいてふるへてゐる四匹のものをじつと眺めながら思つた。

「あゝ、これがあの人の子だつたら」

それ自ら満足してゐた彼女の母性はそれが夫婦の情愛と結びつけられようとした時に俄然として反抗した。今こゝにかうして彼女の全心を占領してゐる四匹の子供、それは強要されたる性交の、餘儀ない、宿命的な、生理的結果なので、決して相互の愛情の産物ではない。またその理由にもならない。はたその夫婦關係を肯定し、或は享樂させるところの理由にも原因にもならない。彼女の矜や喜は母子のあひだの神聖な問題で、僧犬にはかゝはりのない、かゝはつてほしくないことなのである。覺醒した彼女の心は今やそこに

一點情ない汚斑のあることを見た。

「あの人の子だつたら！」

いはゞそれは戀人の子に向けらるべき筈であつた母性が、その正當の對象を得ないために、失つたゝめに、こゝに戀によつてはなく、運命によつて授けられた僧犬の子に對して、假に補償的に働いたにすぎなかつた。それはいかに熱烈であらうともさうであつた。

その次の日の午後のことである。僧犬はよほどまへに食を求めに出かけたまゝ待てど暮せど歸つてこない。彼女はひどく空腹を感じてきた。乳が出なくなつたもので子たちはひつきりなしにきゅんきゅん啼いてひとつの乳くびから他の乳くびへと吸ひついた。その聲が頭へ針を刺されるやうにこたへるさぞひもじからうと思ふ。さうして詫びるやうな氣持でかはるゝなめてや

つてもどうしても啼きやまない。乳くびは血のにじむほど痛くなつてきた。彼女はじり／＼した。

「えゝ、早く歸つてくれゝばいゝものを」

彼女は彼がまたどこかで牝犬の尻を追ひ廻してゐるのにちがひないと思ふ。彼は口を拭つて知らん顔してゐるけれど彼女はその身體についた牝犬らしい匂に氣がついてゐた。彼女は唾でも吐きたかつた。そして嫉妬からではなく、子供に對する愛情から腹が立つてならなかつた。もう我慢ができない。子たちは啼き死ぬほど啼いてゐる。彼女は餘儀なく子供をおいて餌をあさりにでかけることにした。さうしてそろ／＼と身を起した。子たちは乳房につるさがつたがぢきにはなれて轉がつた。そして一層聲高くきゅん／＼と啼いた。彼女はその聲に心を残しながら穴を出た。さうしていつもいちばんはじめに行

く大きな芥捨て場へいつたが、あらかたもうほかの犬にあらされて、空虚な胃の半分をみたすほどの食物も見出せなかつた。彼女は途中で僧犬にあひもするかと思ひく歩いたけれど運悪くとうく出あはなかつた。その癖ほかの犬には度々出くはしたが、彼女には子をもつた母獸の狂的な勇氣があつたのですこしも怖くはなかつた。それから雑沓した市場のはうへ行つた。そこで時々意地の悪い人間にいちめられながらもかく相應の餌を拾つた。それはいつもならばもう充分なほどであつたが、今日のやうな極度の空腹とからつぽの乳房をみたすにはまだ足りなかつた。心あたりの處は残る隅なく歩いたのだけれど。彼女は様子の知れない場處へ行くのには動物的な不安を感じた。それにおいてきた子供も氣がりでならない。彼女はさんざ迷つたあげく、今頃はたぶんもう僧犬が歸つてゐるだらうとあてもない氣やすめをし

ながら思ひきつてこれまで行つたことのない横町へ曲り込んだ。うす氣味のわるい小路をぐるぐるとかひもなく捜しまはつた末やつとのことで路ばたに捨てられた大きな魚の頭をみつけた。で、大急ぎでぐわつと噛みついて無茶苦茶にがりぐと噛み碎いてのみこんだ。彼女は幾度も喉に骨をたて、はぎやつと吐き出した。それでやつと堪能して歸ることにした。彼女は腹の重いだけ氣が輕かつた。彼女は腹一杯の食物が一足ごとになれて、全身にまはつて、自分を元氣づけ、甘い、温い、養ひになる乳となつて乳房に溜つてくるのを感じる。その乳が早くのませてやりたいと思ふ。彼女はいそぐとして足の運びもかろく歸つてきた。住みかへ近づいたのはもう暮れ方であつた。

「おや」

子供たちの聲がきこえない。

「ねてるのかしら」

彼女は孔からとびこんだ。ゐない！ 僧犬もゐない。變な匂がする。妙な足あとがある。犬の匂ではないし

「あ、豺だ」

彼女は氣ちがひのやうにかけだした。豺は夜など時折このへんまでも忍んでくることがある。彼女はその匂を知つてゐた。彼女は地べたに鼻をつけて出来るだけの速さで追跡した。まだ間もないやうだ。はつきり残つてゐる。彼女は匂をたどつて終に町からかなりはなれた大きな森へはひつていつた。なんにも怖くなかつた。絶望的な怒が影を見せない敵にむかつて燃えあがつた。森へはひつてからは急に追跡が困難になつた。そこにはいろんな鳥や獸の匂がしてごちやく／＼に互に他を消しあつてゐる。とはいへ彼女は縦横無盡

にかけまはつてどうでも敵を見つけようとした。そして奥へ奥へと進むうちにばかりと小さな沼のふちへ出た。大木がないかはりに灌木と雜草がもうもうと密生してゐる。彼女はそこまできてはたと當惑した。象の群が水をのみにきたのであらう、そこらぢゆうめちやく／＼に踏みつけられてなにがなんだか譯がわからない。彼女は藪のなかを押しわけ、くゞりぬけ、難儀をして嗅ぎまはつたが豺の匂は絶えてしまつた。しかたなくひきかへして別の方向へ捜しはじめた。まはりまはつて歩くうちまた沼のところへ戻つてきた。で、またひきかへした。歩一步と夜が近づいてくる。あせりにあせつて別のほうへ別のほうへと捜すうちにまたもとの處へ出てしまつた。もうどうすることもできない。確に敵はこゝへきたには相違ないがそれから先がわからない。足あともない。匂もない。到るところ象にへし折られ、踏み躪られた枝や葉

を見るばかりである。彼女は絶望した。精も根もつきてしまつた。その時その凄しい怒が忽然として深い／＼悲と思慕の情にかはつた。彼女は仰向いてあはれな長吠えをして子供を呼んだ。あの無心なものが豺のあとについてちよこちよこと歩いてでもゆくかのやうに。彼女はくりかへし／＼呼んだ。そして今一度呼ばうとした時にがさ／＼といふ音をきいた。彼女は赫として身がまへした。そこへ僧犬が現れた。彼は歸るとすぐ事變のあつたことを感づいてあとを追つてきたのである。彼女は手短かに一伍一什を話した。

「あきらめるよりしやうがない」

彼も流石に悄然としていつた。そこに感情の共鳴があつた。

「わしが早う歸らなんだのがわるかつた」

彼女はもうそんなことを咎めだてする氣もなかつた。彼らはだらりと尻尾

を垂れて申し合はせたやうに黙つて住みかへ歸つた。

夜である。彼女は坐りなれた穴の隅にすわつて、そこにまざ／＼と残つてゐる子供の匂を嗅いで悲しい／＼聲をあげた。彼女はまた豺の匂を嗅いであらたに母獸の怒を燃やした。

「あゝ、あの子たちはどんなにか啼いて私を呼んでゐたのだらう。それをあの口の裂けた豺めがき／＼つけてそつと忍んできたのにちがひない。あの子たちはそれを私だと思つてよち／＼と慕ひよつたのだらう。それをまあよくも／＼むごたらしく一つ一つくひ殺して……かにしておくれよ。かにしておくれよ。私があるかつたのだから。私さへるればこんなことにはならなかつたのに。おまへたちがひもじからうと思つたばかりに……あゝ、私はどうしたらいゝだらう。出る時にあんなに慕つて啼いたものを……のませてやりた

彼は手を合はせぬばかりにしてかきくどいた。彼女はうなだれて黙つてゐた。彼女にはよくわかつた。それほどまでに思つてくれるのをありがたいとも思つた。そんな苦しみをさせるのはすまないとも思つた。出来るならどんなにでもしたかつた。が、どうにもしようがなかつた。それは彼女の力に及ばぬことだつた。彼女は彼をさだめられた夫として承認した。人身御供にあがつた氣持で泣く／＼身をまかせた。それがせい一杯のところだつた。それ以上は彼女にとつていはゞ背理であつた。彼女の肉體を構成する細胞の一つ一つが絶対にそれを拒絶した。それは彼女がまだその時期に達しない處女であつて、それを彼に弄ばれるのと同然であつた。彼女はそれをしも忍んだ。それ以上なにが望まれようか。

「ごめんなさい」

彼女はいつた。それは真底からの詫であるとも、もに斷乎たる拒絶でもあつた。僧犬は溜息をついた。彼は數多い呪法のなかに一途な女の戀を忘れさせる法のないのをくやんだ。しかも彼はなほ懲りすまに執念くかきくどいて夜となく晝となく彼女を惱ました。

「わしはこんな身體ぢや。さきはもう見えてゐる。わしはこのまゝでは死んでも死にきれぬ」

そんなこともいつた。實際彼の身體はひどく弱つてきた。全身の惡瘡はますます烈しくなつた。彼は間がなすきがなそれを爪と齒で搔きむしつてゐる。そのたんびにはら／＼と毛がぬけて赤肌から血膿が流れる。爛れ目のうへに眉毛も鬚もなくなり、肉ばかりの尻尾がちよろりと垂れて、見るもいやらしい姿になつた。彼は痒さに責められて疲れきつた時のほかはおち／＼と眠る

こともできない。氣力も體力も衰へはて、今はたゞ猛烈な獸慾ばかりが命をつないでゐる。こんな有様で思ふやうに彼女と楽しむこともできずに死んでしまつたく死にきれないのであらう。とはいへ彼女のすてばちな無關心、冷淡な従順は彼の執拗な強要のために再び積極的な嫌惡となつた。それは本然の傾向に戻つたものをわる強ひされる時に現はれる抑へがたい自然の反抗であつた。彼女はうるさくかきくどかれるほど生憎に「あの人」が戀しくなつた。さうして始終「あの人」の夢を見た。それがいよ／＼彼女を堪へがたくした。彼女はまたもや逃走を考へはじめた。

「今度こそ命がけだ。が、もうしかたがない。どうでもなるが、もう一度逃げてみよう。どうしても逃げおほす。さうしてあの人のところへ行く。あゝ、私はガーズニーへ行かう。ガーズニーへ行かう」

ある夜彼女はそうつと穴をぬけだした。そしてまつ暗な路をクサカのはうへひた走りに走つた。二度めなので迷ふこともなかつた。彼女は自分の足音をさへ恐れた。僧犬は弱つてはゐるが慾望や嫉妬はその四肢に魔物のやうな力を與へるであらう。彼女は無二無三に走つてやうやく渡渉場のところまできた。胸が裂けさうに苦しい。足が萎えてへた／＼とつぶれさうになる。

「こゝを渡ればひと安心だ」

彼女は一生懸命氣をひきたて、渡りはじめた。岸に近いところは静におどんでゐたがまんなかへ出れば出るほど流が強くなつてくる。彼女は鼻先を水面に出して必死と泳いだ。併し氣ばかりはあせつても足の力がぬけて充分に水を掻くことができない。それで目あてのはうへまつすぐに行けないばかりか時々ぶくりと頭までもぐる。彼女は見る／＼押し流された。流れはますます／＼

早く、水は深く、川は廣くなつてゆく。精も根もつきてしまひさうになつた。で、思はず喘がうとしてがぶりと水を呑んだ。彼女は最後の努力をした。嬉しい！ 岸が近づいた。流もゆるくなつた。とう／＼泳ぎついた。が、そこには適当な足場がなかつた。彼女はやつと前足をかけても後足をあげる事ができない。そして、もがいてるうちにまた押し流される。そんなことを何度もするうちに氣がぼうつとしてきた。

「あゝ」

彼女は無茶苦茶に泳ぎついてははなれ、泳ぎついてははなれた。そのうちどさりとなにかにぶつかつた。脇腹に強い痛を覺えた。それは天の佑であつた。大きな木の根が水の中までのびだしてゐた。いゝ按排にそれに身を支へられて辛うじて這ひあがる事ができた。そこで急に氣が弛んでよろ／＼

とした。そして、すぶ濡れのまゝへたりと倒れてしまつた。

「私はこれなり死ぬのかしら」

そんな氣が夢のやうに頭に浮んできた。さうして死にさうに喘いでゐた。そのうちふと彼女はかすかに遠吠の聲をきいたやうに思つた。そしてはつと起きあがつた。恐怖が彼女を力づけた。彼女は見當をつけて、密生した藪を斜につゝきつて本道へ出ようとした。彼女は全身疵だらけになつたほど困難したが、ともかくも目的を達した。僧犬のけはひもなかつた。

「まあよかつた。もうすぐクサカだ。それからガーズニーへ！」

彼女の胸は喜に躍つた。案内知つた路を勇んでかけた。なにはともあれ僧犬をまいてしまふまでは走らねばならぬ。で、わざとクサカの焼け跡へははひらずにぼか／＼した草地を横ぎつて、町から大きく迂回してゐる街道

の先のはうへ出ようとした。そして句をまぎらすためにそこいらにごろ／＼眠つてゐる野飼の牛の間を縫ふやうにして行つた。さうしたらひよつくりと、いつぞや異教徒が祭をしてゐた榕樹のあるところへ出た。星あかりにすかしてみたら新しい堆土のうへに大きな石がおいてある。

「あゝ、こゝだつた」

と思つた。それから森のはうへ行かうとした時に彼女は突然恐しい勢で走り寄る足音と、きゝなれた僧犬のうなり聲をきいた。彼女は立ち竦んだ。それと同時にぐわつととびかゝるけはひを見て危く身をかはした。彼女は鼻の先で猛りたつ彼の疎な毛が針みたいに逆立つてるのが見えるやうな氣がした。

「どこへゆく」

僧犬は忿怒にふるへながらいつた。そのとき彼女にはもう恐怖の影もなか

つた。たゞ氷のやうな絶望があつた。

「どこへ行くのぢや」

噛みつきさうにいふ。彼女は黙つてゐた。

「わしは知つとるぞ。おのしは彼奴のどこへ行くのぢや」

彼はさも憎さうにいつた。

「これ、血迷はずとようきけよ。あの男は死んだぞよ」

「え」

彼女はふる／＼とした。

「嘘です。嘘です。あなたはひとを騙すのです」

「嘘ぢやといふか。彼奴はこのわしが殺してやつたわ」

「お黙りなさい。あの人はあなたなんぞに殺される人ぢやない。さあ、いつ、

どこで、どうして殺しました」

僧犬は「いいい」といふやうな、いやな、絞り出すやうな聲をした。嫉妬がこみあげたのだ。

「馬鹿めが。毘陀羅法で咀ひ殺したのぢや」

彼女はぎよつとした。半信半疑になつた。呪法の力は知つてゐる。

「そのびだら法とはなんです」

「知らずばいふてきかしてやる。屍骸をやつて人を殺させる法ぢや。名さへ知ればど奴でも殺せる」

「それごらんない。あの人の名も知らないで」

「彼奴はヂエラルといふた」

「え、あなたはそれは名ぢやないといつた」

「ふ、ふ、嘘ぢや。わしは彼奴の名を知つたばかりか現在彼奴を見た。彼奴は苦行をして居るわしのまへを通つてこの顔に唾を吐きかけをつた。おのしのいふたとほりの男ぢやつた。暫して森の中で、ヂエラル、ヂエラル と呼ぶ聲をきいた。ヂエラルといふ名は邪教徒にあるのぢや」

「でもあの人は屍骸なんぞに殺される人ぢやない」
彼女は強情に盾ついた。さうすることが戀人の命を救ふことでともあるかのやうに。

「まだいふか。これ女、ようきけよ。彼奴がどれほど腕前があらうと呪法には勝てぬぞよ。屍骸には鬼が憑くのぢや。逃げもかくれもできぬのぢや。まんいち相手に行力でもあつて殺せぬ時は戻つてきて呪法の行者を殺す。いづれか殺さねばおかぬのぢや。わしは命がけの呪法を行ふた。それもおのし故

ちや。屍骸は戻つてこなんだ。どうちや、彼奴はどうでも死んだのぢやい。それ、これが彼奴の墓ぢや」

「え、ではほんとうに……」

「殺したがどうした。切りこまざいても飽き足らぬわ」

彼女はぐらくとした。凄しい女の怒に燃えた。彼女は矢庭にとびかゝつて相手の喉くびと思ふところへぐわつとくひついた。僧犬は不意を襲はれて仰向に倒れた。彼女はのしかゝつてしかとおさへながら死物狂に頭をふつて喉笛をくひちぎらうとした。そして僧犬がげえくとかすれた聲を出してはねかへさうともがくのをどこまでも噛みふせてゐた。僧犬はとう／＼息がとまつた。ぐたりとしてころがつた。彼女は血みどろの口をはなした。さうして戀人の墓石に身をすりつけて悲鳴をあげた。それから彼女は犬にも人間に

も通じない獸人の言葉で濕婆の神に祈つた。

「濕婆の神様、私をあはれと思召すならば、この身の穢を淨め、今一度もとの姿にして、どうぞあの人のそばへやつてください」

獸人の祈は神にとゞいた。彼女は突然五臟六腑がひきつるやうな苦痛を感じて背中を丸くしてぎやつと吐いた。わる臭い黒血がだく／＼と出た。それは體内をめぐつてゐた僧犬の血であつた。それと同時に彼女はくる／＼とまはつてばかりと昏倒した。

やゝあつて彼女は我にかへつて立ちあがつた。さうしてなにか一皮ぬいたやうな氣のする自分の身體を撫でまはした。それは完全な女の姿であつた。彼女は狂喜の叫をあげた。それは人間の聲であつた。彼女は濕婆に感謝すべく地にひれ伏した。その時大地がくわつと裂けて彼女は倒に奈落の底へ墮ち

ていつた。闇から闇へ、戀人のそばへ。

一七八

大正十二年七月四日

大正十三年五月五日印
大正十三年五月廿日第一刷發行

大泉幣
定價一圓二十錢

版權
所有

著者
發行
者

中
勘
助
岩
波
茂
雄

東京市神田區南神保町十六

理想社

發行所

東京市神田區南神保町

岩波書店

電話東京二六二四〇番
電話牛込六九四五番

終

